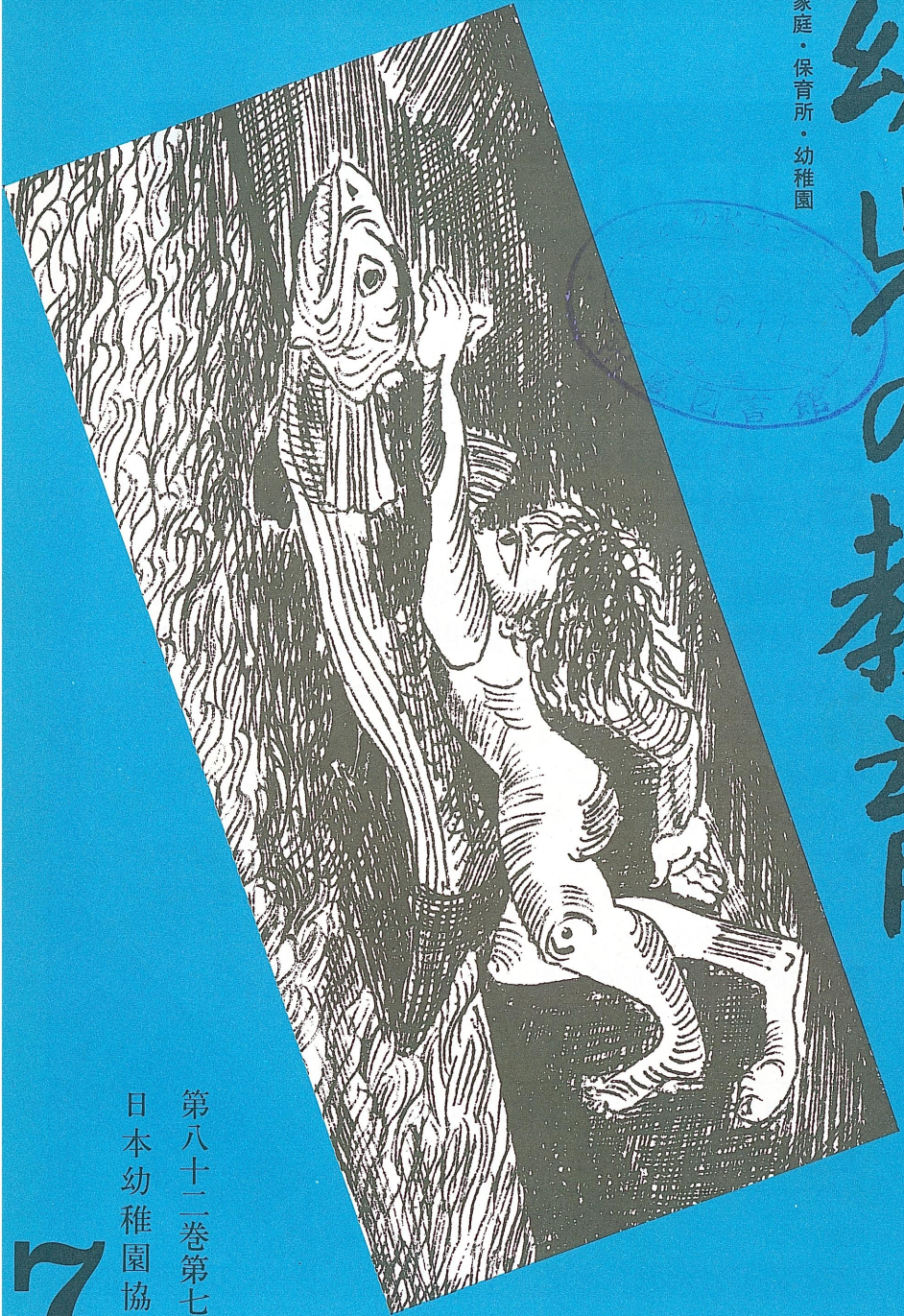


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育



第八十二卷第七号
日本幼稚園協会

7

近藤充夫監修

一斉指導で楽しく展開する

幼児の運動(全3巻)

近藤充夫・中西雄俊・石渡敬一・渡辺真一 著

1、大型遊具を使って 2、小型遊具を使って 3、かけっこ・プール・運動会

一斉活動でのびのび育つ幼児の運動遊び集大成。保育を楽しくする画期的な全3巻です！

- 豊富なイラストと適切な文章で、指導の方法が一目でわかります。
- 遊具別に分類されているので、例えば「平均台」でどんな遊びができるか、すぐわかります。
- 一つの活動に対して応用例がたくさん示されているので、園の実情に合わせてたり、創意工夫したりするのに大変役立ちます。
- 「うまくできない子ども」への配慮も充分にしてあるのが、本書の特徴です。

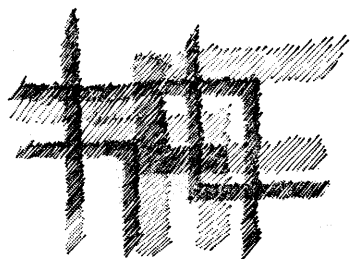
B5判・各200頁・定価各1,800円
セット定価5,400円

好評発売中

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育



第八十二卷 第七号

幼児の教育目次

—第八十二卷 七月号—

© 1983

日本幼稚園協会

「教育の時代」を考える……………中内敏夫…(4)

子どもたちが見方を変えて行く時

—三歳児の育ちの中から—……………山路純子…(6)

《特集・捨てる／拾う》

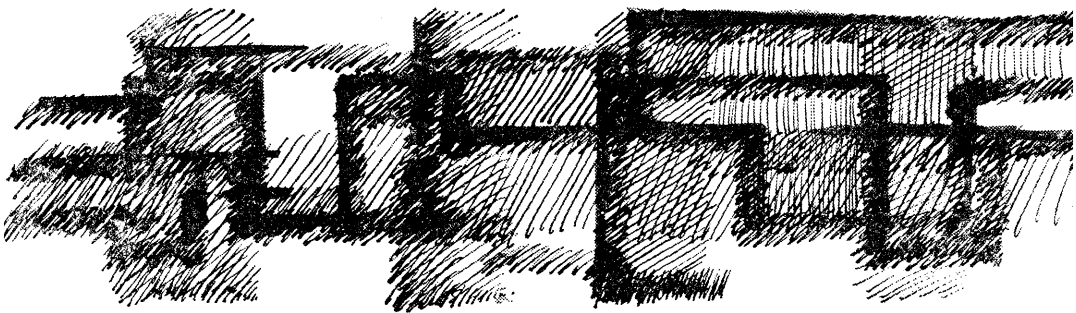
捨てられない家庭保育……………佐野恵子…(14)

「捨てる」と「捨てない」……………守永英子…(16)

捨てる・拾う……………橋爪千恵子…(18)

私の場合の「捨てる」とは……………赤羽美代子…(20)

石を拾う……………村田修子…(23)



遺棄された子ども……………森下みさ子…(25)

私の保育……………宮川悦子…(29)

近代短歌に現われた子ども(十一)……………大塚雅彦…(36)

私のまわりの子どもたち……………大塚房…(44)

記録映画『フレーベルの生涯と思想』を製作して

……………茂木正年…(46)

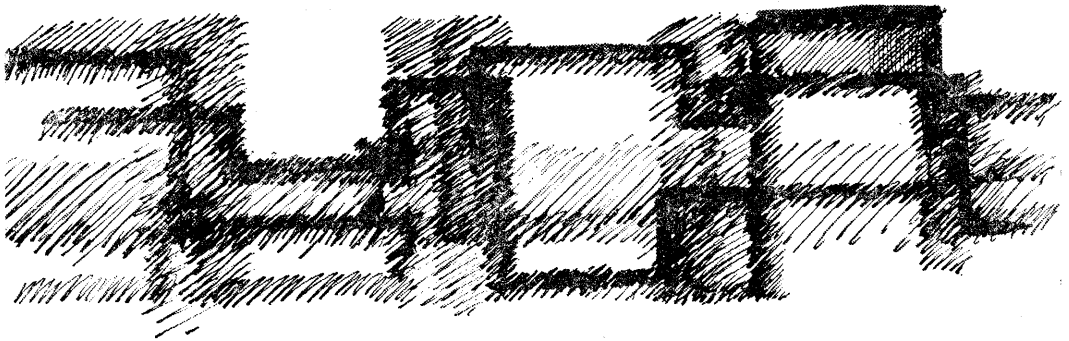
エリクソンと幼児教育(十八)……………仁科弥生…(54)

編集委員 外山滋比古・田中三保子

村田 修子

編集主任 本田 和子・皆川美恵子

表紙・織茂 恭子 表紙題字・比田井和子 カット・福田 理恵



「教育の時代」を考える

中内 敏夫

十数年まえのことである。そのころ「第三の教育改革」とよばれた教育の総合的な改革案が発表され、

「高度学歴社会」などといったことばがやはりはじめていたころのことである。ある町の母親たちの小さなサークルによばれていった。「改革」とか「答申」とかいつているが、よくわからないので、専門家の頭でまとめて教えてほしいということだった。けっこうずくめというわけにはいくまいといった意味のことをはなしたと思う。三、四の質問があったが、ひとつ印象に残ったのが、農家で苦勞してきたらしい老年の母親の感想である。

わたしたちの時代には、今日は手伝いはいいから学校（小学校）へいけといわれただけで、おどりがあがるほどありがたかったもんだ。それがなんと、小学校で、さらに三年も学校にいける時代になったんだから、中味は少々やすものでも有難く思わなくちゃ——というのである。

「有難く」思わなければならない状況は、そのご、さらにすすんだのだった。ゆりかごから墓場までということばがあるが、ゆりかごからどころではない。生れたとたん、いや、おそらくはそれ以前から、日本の子どもは、「教育」的環境にとりこまれて、誕生し、育

つ。としとればとしとつたで、公的生活からは引退しても、生涯教育とかで「教育」生活からの引退はない時代である。ゆりかご以前から墓地直前までの「教育」時代で、児童労働からはじまる一生働きづくめの時代と比べると、「有難い」こともかもしれない。

やすものであれ九年間も労働を離れて学校にいけるだけで有難い話という考え方は、おそらく、今日なお多くの人びとの意識ではないだろうか。総理府の「教育に関する世論調査」によると、八〇パーセントもの親が、わが子の教育はうまくいっていると考えているそうである。しかし、わたくしは、この、やすものでも結構という論法に、こだわるものを感じる。わたくしたちの時代をおおっているこの「教育」の時代の「教育」は、かこくで、人間を破壊しつづけた、かつての寄生地主制下の資本主義的賃労働からの救いとして、それに対置されていた教育と同質のものだろうか。その、おそらくは観念のうえだけのものであったよう

こぼしき教育の世界と同質のものなのだろうか。むしろ逆で、その労働と同質のものではないか。

よりよく教育された人格、よりできる子どもをめざして、わたくしたちは、毎日努力している。わたくしも、教師のひとりとしてつねに、たゆむことなく、そうありたいとねがっている。ひとりの親としても、そうありつづけたいと願っている。教材つくりを頭をなやまし、指導過程について仲間と相談をする。

しかし、わたくしは、こうした教育方法上の問題に頭をなやます教師であるとともに、そうやって自分が工夫をこらしている教育とはそもそもなものであるかに、心をつかう人間でもありたいと願っている。

(お茶の水女子大学)

子どもたちが見方を変えて行く時

——三歳児の育ちの中から——

山路純子

「おはようございます。」

「先生、僕ですよ。」

園舎の角を曲って昇降口へ走って来る子供たちを出迎える言葉を交わしながら、今日はどんな遊びが展開して行くだろうか予想をする。

「昨日、水族館でイルカショーを見て来たよ。ジャンプをしたりボールも投げたよ。」

「おばあちゃんの所へ行って来たの。」

こうした言葉が、その日の活動のきっかけとなる事が

多い。既に準備して置いた保育室の遊具・用具の配置に目をやりながら、子供たちの活動の糸口をどこから開いて行ったら良いかと考えを巡らす。子供たちの姿がコマ送りの映像を見るように現れては消えて行く、緊張する一日のスタートの一瞬でもある。

身支度を終えると、すぐさま昨日の続きの積み木の基地に入り込む子供、友達の様子をじっと見ている子供、保育者に要求をぶつけて来る子供など遊びに取りかかる姿は様々である。間もなく子供たちは遊びに没り、活動

が渦を巻くように広がって行く。

毎日繰り返されているこうした活動の記録を見直して行くと、そこにはいくつかの変化期を見つけ出す事が出来る。子供たちが遊びに取り組む姿に……言い換えれば子供たちが自分を取り巻く様々な環境に対して働きかけて行く姿の中に、子供たちの見方・考え方の変化をとらえる事が出来る。ここでは、三歳児の事例をもとに育ちをとらえて行く事にする。

〈囲いの中から外を見る時〉

入園して間もない頃、子供たちは保育室がとて広く感じるらしい。おもしろそうな遊具を見出し遊び始めても、誰かが側にやってくると不安定になる。邪魔をされずにとっぷりと遊びに浸れる場を求めて来る。壁面を利用して、木枠や柵などで囲った小さな家が蜂の巣のようにいくつも作られる。囲いの中は一時子供たちの楽園となる。しばらく、この囲いの中の遊びに安定した子供たちは、外の様子がとても気になり始めるのである。囲

いの家を足場として外に出て行つては、新しい遊具を見つけ出し持ち帰って来たりする。この頃になると、段ボールで作った囲いの壁に窓を開ける事を喜んで承諾するようになる。出入口になる側面を保育室の中央に向けて開閉する事にも同意をし、自分から「ピンポン」と呼鈴を付けて欲しいと言いつつ、ミカン箱を利用した靴箱を作るとそれを玄関に置いて友達が来るのを待つようになる。

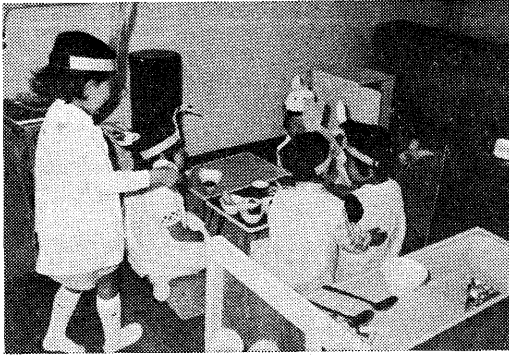
次第に、子供たちはもっと大きな家にしたと要求をぶつけて来るようになる。囲いはそれまでのように頑丈な必要はなくなり、ほんの側面覆つていれば十分となる。子供たちの目には、遊具の配置や立体構成をひとつの塊りとしてとらえられるようになり、見えない囲いに気づくようになって来るからでもある。

〈お面を被って遊び始める時〉

友達とのかかわりを強く求め始める五〜六月頃、子供たちは「違い」を意識するようになる。逆に言えば、

「同じ」という事は、それだけで仲間にもなり得るのである。

この時期になると、子供たちは毎年お面を要求し始める。お面と言っても、厚紙に子供の要求する絵を描く、それを頭に被れるようにしただけの物である。子供たちは、動物のお面を特に好む。表情にもとても敏感で、保育者が描き終わるまで手元をじっと見つめていて、形に



▲うさぎのおうち

注文をつける。例えば、「笑っている目にして。」とか「○ちゃんと同じに歯の見えるウサギがいい。」などと言うのである。出来上がったお面を被ると早速動物に変身である。イヌ語やネコ語でのお喋りが保育室に響きわたる。

お面を被る事によって、子供たちは今までの自分ではなくなり、大いに力づけられもするようである。同じお面を被ってさええすれば、なかなか入れてもらえなかった遊びにも、すんなり入り込む事が出来ることに気づいて来る。このように遊びへ入るきっかけを失わせないようにするため、即座に要求に応えられる準備が必要となつて来る。

「耳の中をピンクにして。」と拒否されて来たお面の手直しにも忙しくなる。お面は、仲間としての条件づけともなる。

可愛らしい動物のお面がほぼ出揃う頃、子供たちは図鑑を持ち出して来て恐竜やマンモスなど恐しそうに見えるお面を作ってほしいと要求して来る。お面を被ると異



▲恐竜の仲間

様な鳴き声を発しながら、強さを示すかのように、歩き回る。男の子が、自分の力が強い事を相手に知らせながら仲間作りをする時期に入る頃、こうした強い動物に変身する姿がよく見られるのである。

お面は、子供たちにとってどのような意味を持っているのか、次の言葉から想像する事が出来る。

ノリオは、クマのお面を被り続けていた。魅力あるアツシの仲間へ幾度となくはじかれながらも、やっと入り込む事が出来るようになった時の保育者との会話である。

「お面は被らなくなったら仲間に入れるんだよ。」「おもしろい時には、お面なんか被らないよ。」「お面を被るの赤ちゃんはいよね。」

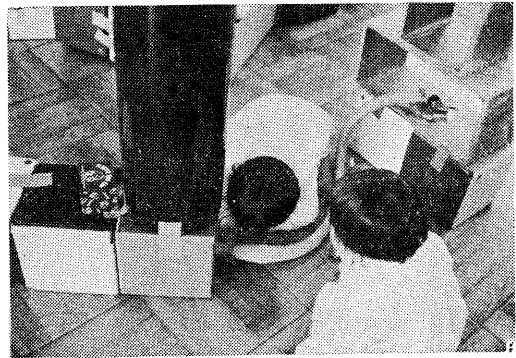
そう言いながら、使い慣れたクマのお面を箱の中にそっとしまいこんだ。まるで別れを惜しむかのように、お面に小さく手を振るノリオ。「バイバイしてんだ。」と照れたように笑うと、アツシの基地に走って行ったのである。自分の力に自信が持てるようになる頃、このお面も必要がなくなり、戸棚の奥にしまわれる。

〈本物らしさを求める時〉

子供たちが、友達とのかかわりを楽しみむようになる頃（十月）から、遊びに行き詰まりが度々見られるようになる。それは、仲間として心をつなぐ力がまだ育つ

ていないからである。このような時に、子供たちの遊びに入りこんで、つぶやきに耳を傾けていると、発展して行くと思われる活動の糸口を探り出す事が出来る。子供たちは、自分の描くイメージを想像の世界に留まらず、実際の物に近づけてみたいと思いついて、事に気づく。

大型積み木で自動車を作っていたヤスオは、「この車、動かしたいな。」と独り言を言った。「ガソリンが入っていないからじゃないの？」と声をかけるエミコ。早速太いホースを探し出して来て、ガソリンスタンドを作る。今まで、走らなかった積み木の自動車は、ガソリンスタンドを基点に動き始めた。一本のホースが、子供たちがよく見ている本物のスタンドのホースに似ていたから、共通のイメージを容易に持つ事が出来たのであろう。遊びは、更に洗車場、修理工場作りへと広がって行ったのである。子供たちの本物らしさを求める心の芽ばえを見る頃、保育者は、子供と知恵を絞り合う準備に忙しくなる。子供たちが今こんな遊びを始めたからきつとキャン



▲ガソリン満タンですか

プごっこを始めるだろう。そのためには、キャンピングカーについて知識を得ておかなければならない。園のワゴンを使えば、キャンピングカーが出来るかもしれない……などと。

この時期は、子供と保育者が共に遊びを創り出して行く時と言える。子供たちは、自分たちの考えた事が遊びに生かされて行く事を知り、もっとおもしろくするため

にアイディアを保育者へぶつけて来るようになる。

〈パノラマになる時〉

子供たちの物の見方に大きな変化期が訪れる。(一月頃)これは、ある時突然にしてやって来るかのように見える。少し前までは、子供たちは、自分と物とが一体となり切り離れたとらえ方はほとんどしていない。それがふとしたきっかけから、物から自分を一歩離してとらえるようになる。こうした姿が子供たちの活動の中に現れ



▲高速道路をつなげるよ

て来る時、成長の階段を実際に目にしたような感動を覚えるのである。

ユウキが小箱で作ったシマウマ、「これ、本当に立つから動物園作りたい。」と見せる。「キリンを作ったら動物園に入れて。」とアイ。次々と子供たちは広い動物園に、自分の作った動物を置く。「動物園まで、高速道路を続けるからね。」ヒロアキは段ボールの切れ端を立体的に組み合わせようと工夫をする。保育室の中の遊具は隅に寄せられ、そこには一つの町を見るように遊びは広がって行ったのである。これは小さな町のパノラマを見るのに似ているので、この時期の訪れをパノラマになる時と名付けている。子供たちは、自分の作った物をしばらくパノラマの中に置いた。直に持ち帰る事をせず、広い視野の中に、自分の作った物を収めてとらえる事を楽しんでいたのである。これは今までずっと、ハイハイをしていた赤ちゃんが、立って歩くようになった瞬間、その視界が大きく広がり全く違った物を見たような新鮮な驚きに似てはいないだろうか。

この姿が見られるようになる頃、子供たちの遊びに客観性が増加して来る。毎年、必ず訪れて来るこの変化をとらえようと息を詰めながら待ち受けている。保育室の中では、質の違った活動が絡み合いを見せながら、四歳児の春を迎えるのである。

〈子供の育ちを見つめて行く中で〉

これまで、子供たちが育つ過程でのいくつかの大きな変化期について述べて来たが、これらの変化を見つめて行く時に、保育者として心にとめて置きたいと思つていゝる事について触れてみたいと思ふ。

―見守る―

うまく遊び込んでいるかと思つと、友達からはじかれていつの間にか一人になってしまう事がある。一人になりながら、その子供は友達との遊びをじつと見つめていゝる。私は、子供たちが良く見せるこうした姿を特に大切に見守る事している。共にかかわったりはしていないのだが、一歩離れたこの位置からは動きの総てをとらえ

る事が出来るのである。心の中に様々な貯め込みがなされた時、子供の方から動き出したと言ふサインを送つて来る。その時が来るまで、子供の近くから見守るようにならなければならないのである。子供自身の中に力が貯えられ、周囲をとらえる目にも変化が出て来た時に、弾みをつけて今の状態から脱け出して行くのである。この見守りとは見極めは大切な意味を持つて来る。

―揺さぶりをかける―

子供たちの活動は、非常にうまく展開して行く時と、どうにも発展性がなくなつてしまふ停滞の時とを絶えず繰り返しているように思ふ。クラス全体が停滞の状態に入り込んでしまった時には、小さな波を立てて、停滞のバランスを崩す揺さぶりをかける必要がある。

例えば、今使っている遊具・用具の質や量の検討である。充分にそれで楽しんだと思ふ時には数量を減らしてみゝる。それまでに見られなかつた葛藤の場面が生じ、いかに自分が多く獲得しようかと知恵を働かせる姿が見られ、力で或いは言葉でなんとか相手を納得させようとする

る様子が見られて来たりする。

また、毎日繰り返されている事への保育者自身の積極的な反省もひとつの揺さぶりとなる。そこに新たな発想を加えて行く事により全く異なった思考の場が生まれて来たりもする。安定した状態が続いている事に対して、保育者自身に揺さぶりをかけねばならない。

―場を整えて行く―

遊びの場、位置、その境界が、活動に大きく働きかけるものである事も見逃せない。保育室の中央に位置づいた基地は、誰の目にも優位な存在として映る。しかし、どこかが崩れて来るとその力を失い、そこに加わる子供たちを結びつける強さを無くして来る。

活動は、物とそれを取り巻く空間があつて成り立つ。子供たちの目にも、物の存在がしっかりととらえられなければ、まともにも無くなる。もし、空間となるべき所に、紙屑でもブロックでも散れて、物と物との境が見分けられなくなつて来ると活動そのものも次第に停滞して来る。同時に、加わる子供たちの思考も停滞して来るの

であるから興味深い事である。散れた場を整える事により、その中で子供たちはお互いに仲間として意識し合い結びつきを強めて行くのである。遊びの場、その配置が持つ意味についても絶えず見直しをして行く必要がある。

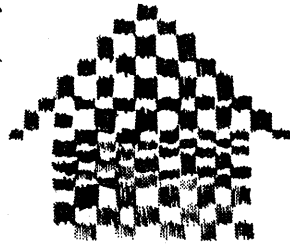
子供たちの帰った後、保育室の片付けをしながら、今日の保育を振り返る。製作コーナーにじっと座りつきでいたソノコの姿が浮かんで来た。ここずっとこの場に逃避するかのように入り込んでいる。明日は、必要が出て来たら、このコーナーは出す事にしよう。私の頭の中には、ソノコのチナツを追う目の輝きが甦って来た。非常にスローなテンポではあるが、チナツたちの遊びへ入り込んで行く姿が続いて映る。明日は、どんな揺さぶりをかけてみようかと思ひ巡らしながら、保育室を整えて、明日の子供たちの登園を待つ。

(茨城大学教育学部附属幼稚園)

捨てられない

家庭保育

佐野恵子



世の中には、捨てて片づく世界と、捨てないで片づく世界があると思います。子どもを生んで育てるといふ仕事は、まさに捨てないで片づく世界に属しているのだと思う時があります。私は、現在、七才・六才・二才・一才の四人の子どもと共に毎日を忙しく過ごしています。

子どもたちが、朝目覚めてから、夜眠りにつくまでの間、身心共に子どもから離れられずに一日が過ぎていきます。小学校に送り出し、幼稚園に送迎し、下の二人の子どもを遊ばせながら、必要最低限の家事をこなし、四人の子たちの心と体の空腹を満たすには、緊張と、耐え

ることと、待つことが要求されます。

時々、夕方になっても、台所は朝・昼の食器が山積みされている時があります。それなのに一才の娘が、どうしても外遊びをしたい、とぐずる時があります。そうなるとうとうしようもなく、家の中のことは放って、外に出ます。そして、夕方の外遊びを楽しむことにしています。夏の日の夕方は、暑い陽ざしもなく、空の色も刻々と変化して、なんとなく心安らぐ時間です。あたりが薄暗くなり始めて、ようやく家に入ると、現実が待っています。台所は手のつけようのないあり様、本当に悲しくなるのをグッとこらえて、なんとか子どもたちの空腹を満たすべく、できる範囲の食事を作らなければなりません。上の子たちは、少しでも好物のものがあれば、それで文句も言わずに食べてくれたりして、なんとか時が過ぎ、ホッと一息つくことがあります。

別のある時は、父親の帰りが遅い日のことです。夕食が遅くなってしまい、二才の子は遊び疲れて眠くなるし、一才の娘も、手や顔をこはんだらけにしてぐずり始めるし、七才の兄は、友だちとの野球遊びの話をしたくて、次々と話しかけてくるし、六才の娘も負けずに、そ

の日、あったことの話をしたがるのです。手と顔と耳とをそれぞれ別々の方に向けながら、下の子たちの手と顔を拭き、パジャマに着がえ、ついには兄と姉に「あとにしてね!」と呼んで、下の二人を寝かせるべく別の部屋に移って行きます。この二人が眠れば、ゆっくりした静けさが戻ってきます。それまでは、この現実を放り出す(捨てる)わけにはいかないのです。二人を抱きかかえる時のような、この重みを全身で受け止め、今を生きるしかないのです。グッとこらえると、次には休らぎと静寂が待っていてくれるのです。時が解決してくれる……そうだからこそ、今を、大変なりに、焦らずに対処できるのです。こんなことをいろんな場面で体験します。

どんなに忙しくても、子どもの要求に、ちょっとした間つき合うと、子どもはそれでも満足して一人で遊び始めたり、次の用事についてきてくれたりします。このように、その場面を切り捨てないで、焦らずに、混乱や当惑などの重みにも耐えて待つと、その場が片づき次が開けることは、子どもが増えるごとに実感しています。もちろん、ほんの少しも待てない時には、選択し、切り捨てることも大切だと思います。そういう時は、子ども

も解って、長くぐずらないような気がします。

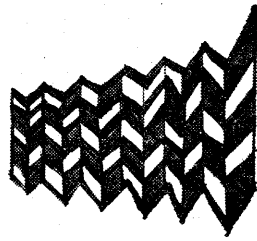
また、捨てて片づく世界の中でも、子どもは、捨てることがとても不得意のようです。四人目が生まれて、家政婦さんを頼んだことがあります。彼女は片づけるプロですから、がらくたみたいなものは、捨てたり、一まとめにしたりして、部屋の中はアツという間に片づいてしまいました。ところが、私と子どもと一緒に部屋を片づけると、特に五・六才位までの子だと、ちょっとした紙の切れ端まで全部とっておきたがるので閉口してしまいます。引き出しの中も全部つっこんで、それで満足しています。ところが小学校二年生になった兄が、最近きれいに片づけるようになったので驚きました。必要なものと、そうでないものとの分類ができ、片づけると気持ちが良いということがわかってきたのだと思います。幼児期を卒業しつつあるのだと思います。そうすると逆に、幼児の間は、片づけられないことを、捨てられないことを、むしろ尊重してあげたいと思うのです。

家庭の保育とは、やはり、捨てられない世界、そういう幼児の時代とつき合う役割も担っているのではないかと……という思いを深くしているこの頃です。

「捨てる」と

「捨てない」

守永 英子



春休みにはいつて、二、三日家を空けた。僅かの間の留守であったのに、帰ってみると、出掛けるときあれほどきれいに咲いていたテーブルの上の花が、見る影もなく色あせて、散っている。『捨てなければ……』と思いつながらふと見ると、命尽きた花々の中に、黄色のフリージアだけが、先の方にはんの僅か小さなつぼみを生き生きと残している。無造作に捨てることもならず、命あるものを捨てることへの小さな迷いの時を少し置いてか

ら、多少のこだわりを残したまま、やはり捨てることにした。

花に限らず、私は物を捨てるのが不得手である。明治生まれの父親に、物を大切にすることを美德として育てられたためか、あるいは、戦争中の物のない時代に育ったせいかもしれないが、同世代の人が必ずしもそうでないところを見ると、私の性分ということらしい。

保育室を飾るために、子どもたちがときどき持ってきてくれる花も、しおれたところを取り除いては、できるだけ長くいけておく。手間をかける割には、もう美しくないことを承知しながら、潔く捨てられないのである。

このような私の傾向に、先日のH（私のクラスの四歳男児）の言葉は、更に拍車をかけた。私がRの持つてきてくれた黄水仙を花びんにいけるのを見ながら、Hは、つぶやくような、詰るような感じで言ったのである。「ほくも、先生にお花あげたのになァ……」

私も、Hから何度かお花をもらったことを覚えていたが、花というものが、数日で枯れて捨てられるものであることを、当然のこととしてお互に了承していると思いつ込んでいたのである。思いがけないHの言葉に、私は、

とまどい、とてもすまない気持ちになって、「そうね。H君からお花いただいたのにネ。お花って枯れちゃうのよネ……」私には、「捨てた」という言葉を口に出来なかった。Hのくれた心まで捨ててしまったように、Hが感じることを恐れたからである。これからも、くれることがあるであろうHのお花を、どう扱ったらよいものだろうか、枯れたことを一緒に確かめて、納得した上で始末すればよいのであろうか、私にとって頭の痛い宿題である。

年度が変わると、毎年子どもたちは、別の保育室に移る。そのために、今までに作って園に置いておいたものを、皆家に持ち帰り、不用の物を捨てる。それぞれの子どもなりに、要るものと要らないものとを分けるが、Aが「もう要らない」と捨てたものを、「格好いい」ちようだい」とBが欲しがることもある。引き出しに入れた小さな画用紙の切れ端まで、持って帰る子どももあれば、惜し気もなく、ほとんどのものを、さっさと捨ててしまふ子どももある。

ダンボールの箱で作った三台の乗物は、しばらく遊びにも使われずに、部屋の隅に積んであったただけなの

で、子どもたちに計って捨てるつもりでいたところ、年長組の部屋に引越してできないのなら、家に持って帰りたいと言う。大きな箱を抱えて、バスに乗って帰る大変さを考えて、これも、年長組の部屋に持っていくことにした。やはり私は、「捨てられない」人間のようである。

考えてみれば、この「捨てる」「捨てない」「何を捨てるか」「何を捨てないか」ということは、人間の生き方の基本的なところと絡んでいるような気がする。ちなみに、現在の私が独り暮らしを続けていることも、父親に可愛がられて育った末っ子の気楽さを、捨てられなかった結果であるようにも思われる。数年前、本誌に連載した「保育の中の、小さなこと大切なこと」も、毎日の保育の中で、の体感を「捨てなかった」ことから生まれたものである。とすると、一見、未練気に聞こえる、この「捨てない」「捨てられない」ということの中に、「捨てられない」「よさがあるのではないか……」

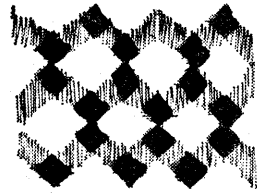
やはり、私は、「捨てられない」人間であることを再確認しつつ、一生に一度くらいは思い切り潔く「捨ててみたい」と思っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

捨てる

捨 う

橋爪千恵子



「捨てる」というテーマをいただいて、まず頭に浮かんだのは「ごみ」。我ながら、「何て夢がないんでしょう」と思い、辞典を引いてみた。しかし、そこにも①不用のものとして投げ出す、(例)ごみを捨てる、と一番初めに書かれている。そこで、「ごみ」を媒介にして、「捨てる・捨う」を考えてみることにした。

私は昨年の秋、静岡県の実業婦人海外派遣団の一員として欧米を約三週間程、視察する機会に恵まれた。五か

国を三週間で回るといふ強行スケジュールであったが、西ドイツとアメリカで家庭滞在があり、ほんの数日にもかかわらずそれは視察の中で最も有意義な日々であった。又、物を「捨てる」という事について大いに考えさせられることがいくつかあった。

まず、西ドイツではこんなことがあった。ある朝、ホスト家庭の奥様が新聞を指さして私に説明してくれたことは——西ドイツでは各家庭で不用になった家具や調度品は、決して捨てない、そういう物を引き取る機関があるので、そこに連絡するとトラックで取りに来る。集まった家具類は一覧表にしてこのように新聞に載せる。そういう物が必要としている人々は非常に安く買うことができる。そしてその利益は福祉施設に寄付する——ざっと、このような内容であった。その話を聞きながら、私は日本の粗大ごみの山を思い浮かべていた。まだ見えそな電気製品や家具などが無残に捨てられている光景を。と、同時にそのごみの山の中から何か掘り出し物を拾おうとしている別の人の姿も。

一方、アメリカでは「ガレージ・セール」を体験した。これは、家庭で不用になった家具や衣類・食器などを各家庭のガレージや庭先などに並べて安い値段で販売する方法である。私達なら捨ててしまおうと思われ

る粗末な物から、立派な家具類までが並んでいた。売り手も立派な家に住んでいる人、買手も中流階級の人が多いと聞いた。世界に比類のない豊かな物質生活を送っているアメリカ人の生活の中で、三十年も前からこのような習慣が生まれ広く人々の中に定着してきたということは、消費万能と思われがちなアメリカ人の知られざる堅実性・合理性を示すものとして注目に値する。このセールでは売り手は不用品を本当に安く値を付け（例えば、五十セントのTシャツ）、買手は、いくら安くともきちんと代金を支払って堂々と自分のものとなり双方にとって都合がよく同時に再び物が生きる訳だ。いつか日本では、長いこと放置されていたさびついた自転車を拾ってきて修理して乗っていた人が、泥棒扱いされたことが話題になったが、そんなことはこのアメリカでは決

して起らないだろう。事実、「果たして乗れるのかしら」と首をかしげたくなる程のボロ自転車価値と共に車庫の隅に置かれていた。

ところで、ある時我が家の二人の子どもが「お母さん、燃えないごみの中からこんないい物を拾ってきたよ。どこも壊れていないのにねえ」と言って、ラジコンのレーシングカーを手に帰って来たことがあった。おそらくラジコン操作がうまくいかなくなって捨てられた物だろうが、二男が電池を入れたら動き出し、うちの子ども達は喜々として使っている。まだ新しくどこもいたんでない鳥かごが捨てられているのを見て、そのまま収集の中に放り込まれるのが忍びなく拾ったこともある。粗大ごみの収集日は私には辛い日だ。直せば使えるような電気製品がバリバリと音をたてて壊される度に痛みを覚える。それよりも、そういう光景を幾度となく見ている子ども達への影響を考えるととても恐ろしい。

一般にマスコミを通じて私達の目に映る欧米は、優雅であるが、一歩足を踏み込んでみると、外国人を数日間

滞在させてくれる程の家庭でさえ、非常に質素で堅実な生活と営んでいることがわかる。ほんの三日間の滞在中ですら、その堅実ぶりに「なるほど」と感心することがいくつあつたのだから、一年、二年となればその差は大である。生まれた時から、こういう両親の姿を見て育つ欧米の子ども達と、あの粗大ごみの山を生んでいる日本の親を見て育つ子ども達とを比べた時、その差に愕然とするのは、決して私ひとりではあるまい。近頃は「もつたない」という言葉を耳にすることが少なくなつたように思う。子どもは勿論、大人もあまり使わなくなつたのではないだろうか。むしろ「今どき古くさい」という感覚の方が強いかもしれない。しかし「消費は美德」といつていた時代は終わり、そのつけが社会にも教育の中にもはつきりと現われている今日、私は自分が欧米で体験したことをより多くの人に知ってもらいたいと思う。そして何かと捨てようとしている人に「ちょっと待って」と声を掛け、「捨てること」が及ぼす影響の大きさについて、もう一度考えてもらいたいと思うのである。

私の場合の

「捨てる」とは

赤羽美代子



私は、昨夏、東トルコへ旅をしました。

20日間の旅を無事に終えて、帰国の途に着く時、私の頭の中に「真実と、捨てるは、互いに向き合っている」と云う思いが、ごく自然に、頭の中でふくらみ始めました。

連日、40度近くの猛暑の旅でしたが、一日一日が織りなす生活は、私を夢中にさせました。古い遺跡については、云う迄ありませんが、東トルコの子どもたち、お

となたちの生きざまに、魅了されたのです。

子どもたちからは「全力を発散する喜び」が伝わってきます。その笑顔・純真な、貧しくも美しく澄んだ眼に圧倒され続けました。黒曜石のような輝きを持った目、はね返るような、しなやかさを持った人びとの心の動きは、何処から来たの？ 何に困ってなの？ と、自分の心を、わくわくと踊らせておりました。

この旅は、私に一つの事を教えてくれたのです。それは「捨てる」と云う事です。

旅行中に出会った、幾つかの体験を記してみます。

旅の途中、私どもの一行のひとりが、高い山頂で、脳溢血で倒れました。登り下りの不自由な場所にもかかわらず、現地の人びとの、ねんごろな処置と、惜しめない労力に全員、ただ感謝でした。行ないと、真実を持って愛し合う「共に生きる」と云う言葉が、実感として、しみじみと身にしみました。

又、私は、パスポート・全財産の入ったバックを、ホテルのレストランに置き忘れて、タクシーで街に出ました。しばらくして、それに気づいた時の私の困惑ぶりを知った、街の人びとの真剣な、木目、細やかな行き届い

た好意と、多くの人びとの善意は、いつ迄も忘れる事ができません。バックが、手元に戻った時の、気持ち良い感激。その上、彼等は目に見えた御礼を、受け取ってはくれませんでした。私の喜びの心の上に、街の人たちの大きな喜びの心を、乗せてくれたのです。

又、砂漠の中を、我々を乗せたバスが疾走中、珍しく汽車が通過しました。急ぎ、下車して、パチパチと撮影を始めると、突然、汽車は、勢いよく、もくもくと黒い煙を吐き出しました。ピーポー、ピーポーと汽笛を鳴らし、撮影のでき映えが良いように、色取りを添えてくれたのです。煙は長く尾を引いて残り、汽笛の音は余韻を残して、汽車は走り去って行きました。思いも寄らぬ汽車からの歓迎を受けて、私たちは、汽車の姿が遠く消えるまで、手を振り、お礼の意を表わし、その好意に答えたのです。メルヘンの世界にいる自分を感じ、思わず「時間よ止まれ！」と声が出ました。暖かい東トルコの人たちとの、交流のひとつでした。

あの事、この事、数えきれない大・小の心の暖まる体験と素朴な真実に直面しました。

この国の人びとと「共に生きる」生活の中で、私の心

は「ハタ」と立ち止まったのです。真実の前に立たされた時、中途半端な自己意識は捨てなければ、東トルコの古い伝統・人びとの誠意が、見えなくなると戸惑ったのです。

私は勝手に「欠くべからざる物」と思い込んだ物質・精神の両面を、身・心に詰め込み、消化しきれずに、喘いでいたのです。ましてや、旅行中は、不自由な思いを避ける為に、必需品・不要品までも、しっかりと身に着け、背負い、その重さにも、頑張ったのです。又、自分は、日本を代表している人物のように、緊張した行動など、ぐたぐたとした精神的な事柄が邪魔になり始めたのです。あれも、これもゴチャ混ぜにした私であってはいけなかったのです。そこで決心して、物質類は整理し、精神面は東トルコの砂漠の中に捨てました。

その時から、何を吸収し、何を捨てるかの価値基準が見えて来たのです。具体的な愛の好意に直面して、真実と真正面に向き合った時、澄んだ心で、はっきりと本物を見分ける力が生まれました。自分が空しくされた時、心の垢が捨てられたのです。身も心も軽くなり、透き通った目・耳で歴史に触れる事ができました。

文明の垢を、しっかりと身につけて、又、注意深く身の安全を計り、旅に出た私でしたが。

それにつけても、私の身から、バナナの皮でもむくように、不要品をむき取り、捨てていったら、一体、中身から、どんな私が出てくるでしょう。どんなに小さくても良いのですが、ピャーと輝くダイヤモンドのような私でしょうか？ いーえ、ちっぽけな銀の粒？ 銅？ 鉛？「大変お気の毒ですが、なーんにも出てきませんでした。中身は「がらんどう」です」と、云う事になるのでしょうか？ 困った事です。

東トルコの古い遺跡と歴史に魅せられ、人びとの素朴な優しさに支えられて、短い旅を終えました。

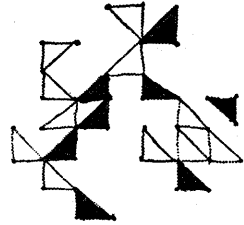
東京の生活は、秩序と混沌が入り交じった複雑な生活が、強いられますが、もう、遮二無二、突き進むだけの生活は終了します。（中身が「がらんどう」に終わらない為にも）

真実の前に裸になり、神様が指し示す狭い道を、広びろと歩む旅に、出発したいのです。そろそろ旅仕度を調べていきたいと願っているのです。

（靈南坂幼稚園）

石を拾う

村田修子



朝いそがしくあたふたと園にいけば、子供たちとまたいそがしく楽しく過ごし、家に帰れば帰ったで家事に、また幼ない子供たちと賑々しくいそがしく……というわけで、普段は物事を余り深刻に考えることなく、ばたばたとしている状態のところへ、こういうテーマを頂くと、矢張り改まって考えなくてはならなくなる。といっても大したことを思いつくわけではないので、一番率直にいま自分が拾っているものについて書いてみようと思う。

いま、といっても既にふた昔も前の頃から突然石にひ

かれるようになった。「石」といえばすばらしい宝石もこう呼ばれるし、菊花石とか梅花石などの奇石などもある。けれども私のいう「石」というのは道端にころがっているただの石ころなのである。

石ころはどの地に行ってもある。だから歩いているときも、バス停でバスを待っているときでも、自分が「アレだ」と思ったときはすぐにしゃがみ込んで拾って見る。私が場所をかまわず拾うので、一緒に歩いている娘に「ママ、みっともないからやめて」と再三注意を受ける。けれど一向にその癖はやまない。ときには赤い石（ガーネットだと言われたこともある）が入っていたり、面白い形をしたのに当ることもあるので尚更やめられないのかも知れない。その結果、私の家には日本各地の小石が水盤や箱にざくざくという状態である。

そのお陰とでもいおうか京都や新潟の方には黄色い石が多かったことや、緑や赤が多いところもあることなどを、その思い出と共に思い出しては懐かしむ。だがいくら小石といっても重みのあるもの、旅行先の一箇所で少しずつ拾っても荷物の重みは加わるばかり、家に帰ってあけてみると、ほうほうから、さらさら、カッチン、

ごろごろ、というように出てくる。それをみんな洗って水盤やお皿に入れて裏返しにしてみたり、隣との配色を考えて動かしてみたり重ねてみたり、ひとしきり眺め、通ってきたときを振り返る。

こうして石は次第にふえてゆく。

その石の一番美しい姿は、何といっても水の中に放ったときの色である。だから箱に入れて置いたものの表面が乾いていると可愛想に思えてくるので、時折、水盤に入れて机の上に置き、また花の代りに眺めて楽しむ。

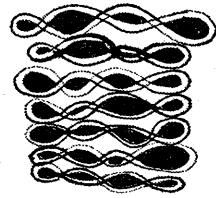
お茶の水の幼稚園の庭は、日本中を探してもここだけではないか、と思うのだが、一面に小砂利が敷かれています。私が奉職したての頃は、ざくざく、と足がめり込む程厚く敷かれていた。グラウンドは、アンツーカーと迄はいかなくても凹凸のない土でできた平坦な場所、と思いつ込んでいた私にとって驚き以外の何物でもなかった。けれどそこに住んでみると、案外怪我はしないし、雨が降っても、やみさえすればすぐに庭に出ることもできる。歩いたり走るときに砂利が崩れてキックがきかないことも、「困ったこと」というよりは次第に、「バネの力をつけることにつながる」と思うようになった。

このように庭中に石があるから、ここでもよく私は石拾いをする。だから洋服を着替えるときなどよく職員室の床にばらまいて、恥かしい思いをする。多かれ少なかれこの影響を子供たちは受けているらしく、よく石を拾ってビニールの袋に入れて、集めたり、水を入れて眺めている。最近では自然物などを集めて楽しむ、ということが余りできなくなっているときだけに、これにも意味を見出している。「これをしましよう」といってみんなでするわけではなくても、子供の周りにいる者の影響を知らないうちに受けていることをひしひしと感じるし、また大変なことだと改めて思う。

或るとき小学校の二年生になった子が放課後立ち寄って、「昨日の遠足で川原に行ったら石がたくさんあったので、先生が石が好きだったのを思い出して、亀の形をした石が見つかったからお土産に持ってきた」というのである。T君と庭で一一緒に石を拾った覚えはないけれども、私のしていることをちらりと見ていたこと、それを思い出してくれたことに大変感激した。と同時になんでもうっかりとやることはできないことを痛感した。その亀石は、時折り水を得てその中でじっとしている。

遺棄された

子ども



森下みさ子

泣き虫毛虫挟んで捨てろ

ペンかくと「待つてました」とばかりに囃したてられ

たこの文句は、「泣虫小虫裏の山コさ飛んでえげ」（秋田

・宮城）とか「泣虫毛虫挟んで捨てろ小川へ捨てろ」

（千葉・群馬）など、少しずつ形を異にしながらも全国

各地に伝えられているそうである。またこれと対をなす

ものであろうか、「おまえは川から拾ってきた」「橋の

下から拾ってきた」といういい方も、様々な地方で子ど

もが親に聞かされ記憶の端に留めているもののようなだ。

「捨てろ」といわれてなおさら泣きたくなる心もとない
気持や「拾ってきた」と冗談交りに教えられた時の頼り
なさは、幼い頃誰もが経験したことらしい。それだけ
「捨てる」「拾う」ということは、この世に現れて間
もない小さき者に寄せる人々の、共通の想いの何がか
を告げているのであろう。

*

民俗学の報告するところによれば、ほんとうに子ども
を捨て去ってしまうのではなく、あらかじめ頼んでおい
た人に拾ってもらって改めて育てる、という「儀礼的な
捨て子」の慣習は各地にあった。捨てられるのは、子ど
もがよく育たない家の子、父母の厄年に生まれた子、人
が死んだ日や大病・怪我の際に生まれた子、その他利口
すぎる子や美しすぎる子、早く歩きすぎたり人並以上の
能力を持っている子、鬼子といわれる子などである。捨
て場所は、氏神様の境内、村の出口にあたる四辻、悪疫
や不吉なものの侵入を防ぐため村はずれに置かれた塞の

神の前、橋の上や道ばた、所によっては箕の中に入れて海や川へ流すこともあった。そうして捨てられた子は、前もって頼んでおいた子育てのよい家の人や易者の言によつてその子と相性がよいとされる人などに形の上で拾ってもらうのだが、そこには子どもに新たな命と良運を授けてくれる者の靈的なイメージがあったのであろう、塞の神の前を偶々通りかかった人に拾ってもらつたり、渡り歩きの塩売りや家舟（水上生活者）など村の人の手を借りるといふ「呪術的な意味」が窺えるものもある。

こうして一時的に拾ってくれた人は、拾い親、捨子親などといわれ、その子の命名を頼まれたり、成長の折節に祝いの品を送つたり、正月や盆に供え物をもらつたりなどして、生涯を通じて呪術的な仮の親子関係を継続する。日本には昔からオヤといつても実の親の他に、産婆の取揚親、最初に乳を含ませる乳親、名附親、守親など、子どもの成長をめぐるあこれと力を貸し与える親がわりがいて、拾い親もそのままでは親元でじっくり育ちにくい子を救う役目を担つていたと考えられている。

*

しかし、これらは子どもの成育の側にたった穏当な捨て子の解釈である。民俗学者岩本通弥氏は、捨てることでこの世から葬り去つてしまふようなもつと凄惨な捨て子にも着目し、捨てる親（家）の立場から別な解釈を紡ぎ出そうとしている（『月刊百科』81・2）。すなわち、家の罪を背負わせ、その繁栄のための生贄として子どもを捨て去るといふ、表に現れにくい民俗的思考にも踏みこんでみようというのである。

家の繁栄を祈願する儀礼に子どもの演じる役割は極めて多く、また「子宝」の諺が示すように、子どもが家の繁栄のしるしとなることもよく知られている。家の祭の主宰者であり、盛衰を司る存在としての子ども、だからこそであろうか、子どもを遺棄し供養することによって災厄から家を守り富ませるといふ考え方も生まれてくる。たとえば、昔話や今昔物語には老いた親の病を治すには子どもの生き肝がきくといわれ仕方なく子どもを殺すが、その孝行ゆえに子どもも生き返つて幸せに暮らし

たという話が見受けられる。これは親の生(十)のために子どもの死(一)が求められる例だが、家が富んでいる(十)ことの説明に異常な子ども・崇られた子ども(一)の誕生を語り伝えている場合もある。「六部殺し」といわれるどの村にも伝わる話がそれで、「村一番の長者は大金を持っていた旅の六部を殺して財産を奪ったので家は栄えたが、その祟りで代々子が若死したり片輪である」という因縁話である。昔話ではもっと恐ろしく、いつまでも口をきかなかった子が名月の晚小便をさせに外に連れ出すと、「おどつつあん、ちょうど今夜のような晩だったね、六部を殺したのは」と口を開き、はっと見ると六部とそっくりな顔をしていた(宮城)というように語り継がれている。

岩本氏は、家の繁栄と子どもの死・不具の対立で形づくられるこれらの論理は、捨て子にも通用するという。前記した捨てられる子どもの中には歯が生えていたり異様な形相をして生まれた子で将来親を喰い殺すとされる鬼子がいるが、特別な時に生まれた子や異常な能力を持

つ子・厄年児などもこの鬼子と同じく、結局は厄を負って頭れた子であり、放っておけば家に災をもたらす悪鬼なのである。そして民俗的な想像力の圏域では、こうした異常な出産は六部殺しの話のように先祖や親の悪業の報いとされ、家の贖罪として子どもを捨てることによってその罪悪から免れるという考えを生み出してゆく。

*

このような思考は、育児書の頻出する江戸中期以降、『捨子教誡の謠』(橘義天)のような書によって「産み落としたるその儘を人にそだててもらわんと古着や綿に畏み巻き余所の軒ばや辻中に捨て置けるさえかくばかり誠めたまう御敵命必ず背く事なかれ」と禁止されるが、なかなかどうして、同じく江戸の雑談を集めた『耳袋』には「賊心の子を知る親の事」と題して、瓜をだましとった子を捨てる親の話がちゃんと記されている。この親、捨てた後四、五年してその子のゆく末を見にゆき、たばこやでよい若者に育っている様子「残念なる事をせし」と帰ってくるが、又二、三年して尋ねると、やはりその

子が大きな盗みをして拾い親にまで迷惑をかけたのと、「よくこそ見限りて、よくも執着を放ちける」と都合よく自慢しているのだから滑稽ではあるが、『耳袋』風に味をつけされた似非現実的な捨子譚ということができよう。

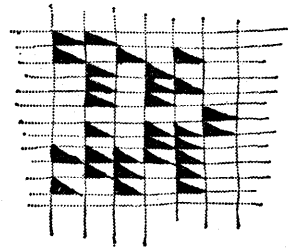
*

ところで子どもと家の対立関係をもっと広い視界に求めたとき、私たちはすさまじい捨て子に会い。山中に捨てられた伊吹童子、または酒呑童子である。母の胎内に宿ること三十三か月、生まれ落ちた時すでに髪の毛が黒々と肩まで垂れ、齒は上下生えそらい、乳母の手の中で目をかっと見開いて「父はいづくにましますぞ」と人語を発した、という類まれな怪童である。やはり鬼子と称して山中に捨てられるが、虎狼野干の類に守護されてたくましく成人し、まさに鬼神の如く人々を震撼させるほどの威力を振うようになる。不思議な出産、山中への捨て子、虎狼野干に育てられ、いつまでも垂髪の童形で荒々しい力を振ったという点は弁慶にも通ずるものであ

り、その共通性をふまえて「捨て童子」型の話にいい及んでいるのが、佐竹昭広氏の『酒呑童子』異聞』である。瓜をだましとった子は盗みを働いて家を沈めるが、これら捨て童子は大盗賊と化し、もっとスケール大きく人々の生活を破壊し荒ふる力を発揮したのであった。

こうして遺棄された子どもは日常を脅かす怪威へとつくりあげられる一方、もっとささやかな形で人々のイメージの裡に抱きとられることもある。圧死せられた赤子の霊である若葉の靈魂と家を富ませる精霊座敷わらしとの関連を説いたのは折口信夫であるが、両者が直接結びつくかどうかは別としても、子どもの霊がどこかに宿っていて家の盛衰を見守っているという幻象は、私たちに、「子ども」をとらえる民俗的な思考の広さを告げてくれる。同じくイタズラ者だが時として富をもたらす河童や、オギアアオギアと泣いて道ゆく人を呼びとめるノツゴなども、葬り去った子をどこかで留め置き、自分たちの幸不幸と結びつけて呼び寄せようとする人々の想像力として、興味深く映じてくるのである。

私の保育



宮川悦子

自分の保育のことを考えるのは、案外、むずかしいのではないかと思います。自分を責めたり、逆に、心はずませることはあっても、冷静に、子どもにとってはどうかだったのか……という見方で振り返ることはなかなかできません。保育そのものが、もともと子どもと保育者が一緒に作っていくものだからでしょうか。

その意味では、今年一年、私はとてもよい勉強をさ

せていただきました。先輩が都立教育研究所の研究生になられ、観察対象として私のクラスを選んで下さったからです。

「見られていること」は厳しいけれど、対象児を追うツールで鋭い目の奥に、私や子どもたちへの暖かい心があると、何故か緊張どころか、のびのびと安心して保育をすることができました。

今、ここで、あらためて、今日までの私の保育につ

いて振り返ってみたいと思います。

ひとりひとりを大切にすって何だろう

私が、保育の仕事について、もうすぐ三年になります。就職するまでは、公立幼稚園への知識もなく、又40人という人数の子どもたちの前で話をしたことさえなかったのです、初めてクラスを担任した時の入園式は、まるで嵐のような一日でした。緊張していて、先輩に「歌でも歌ったら？」とボンと背中をたたかれたことを、今でもはつきりと覚えています。

こんな頼りない保育者でありながら、夢のような理想だけは持っていました。子どもたちにとって楽しい保育をしたい、ひとりひとりが素直にふるまえる空気の優しい保育をしたい、そう思っていました。

ところが、現実には理想にはほど遠く、元気なこと、個性豊かなことにかけては、どのクラスにも負けなかったけれど、集まらない、話を聞かない、落ちつかな

い……といった注意も、私のクラスがいつも引き受けていました。もう少し、二年前の年少（4歳児）のクラスのことを思い出してみたいと思います。

1 誕生会のこと

遊戯室で誕生会があった時のことです。S男が、どうしても行きたくないと言っていました。S男は、いつも他の子どもの遊びを一人でちょっと離れて見ていました。入りたいけれど、まだ、今はいい。今は、見たい。私には、こんなふうに映っていました。でも、誕生会その時は、さすがに困り、なだめたりすかしたりしましたが、頑として動きません。

とにかく、この子が今、いやだと言っている。どうしていやなのか私にはわかっていないのだから、ひとまず、今は、この子の気持ちを受けとめなくてはいい……。と他の幼児を遊戯室に残して私はS男のそばにいました。会も終わり頃、どうにか気持ちの静まったS男を連れて行ったのですが……。最後まで、ど

うしてS男がいやがったのかはわからなかったし、当然、39名の子どもたちも落ちつかずにいたようです。

私はひとりひとりを大切にしていたでしょう。確かにS男ひとりのことはずっと気にかけていたけれど、それもS男にとってはどうなのでしょう。他の子どもたちにとってはどうだったのでしょうか。彼らももしかしたらS男とは違う場所で、S男と同じように不安定になっていたのかもしれない……。甘いと言われても、この身が二つになれたらいい、と思います。でも、それもできない私にはS男が泣くもつとつとその前に、しなくてはいけないことがあったようです。誕生会そのものを、S男にもおもしろそうだなと思えるような誘いかけや心くばりを……。

2 七夕かざり製作のこと

6月、それぞれが5種類の七夕かざりを作るようになりました。年少の作品としては確かに疑問の残る活動内容です。私は、ここで、一斉活動として行なわな

いこと——に頑固になりました。

自由遊びの中で、40人に少しづつ誘いかけをしたため、バラツキができました。7月7日が迫ってくる、「おはようございます」の挨拶のすぐあとに、「ねえ、A君、三角つなぎを作ろうね」と半ば強いるように声をかけたりしました。私が、一斉形態を拒んだのは、一体、何のためだったのでしょうか。今から思うと、一番の理由は、私自身が嫌いだっただけからようです。

△△△や◇◇◇に気をとられて、今、子どもたちが、どこで、何をして、どんな気持ちで遊んでいるのか、という大切なことへは、心を向けることさえできませんでした。

今、2回目の年少を担当しています。頑固なこだわりも少し消えて、皆と一緒に遊ぶことも楽しいな、っと思えるようになりました。でも、ひとりひとりを大切にすることなにかについては、もう一

度、考えてみたいと思っています。言葉や概念による理想としてではなく、目の前にいる子どもの表情や目の輝きを拠りどころにして、考えてみたいのです。40人という人数、私の保育の未熟さ、幼稚園の環境……などなど。これらの現実から目を離さないで、私自身のテーマとして、これからずっと暖めてみたいな、と今思っています。

子どもの遊びを知ることってむずかしい

子どもの遊びを見ていると、楽しいこと、驚かされること、不思議だな、と思うことがたくさんあります。そして、私という大人とは、ずいぶん違った見方、感じ方をしているようです。一つのダンボール箱を通して、子どもたちと私のイメージに、いかに大きな違いがあるのか——を子どもたちから教えられました。このことを記録をもとに振り返ってみたいと思います。

1 9月24日（金）

何日か前から、電車ごっこが続いている。廊下に長くつなげた中型積木の上に乗る、首から笛を下げて、それぞれ運転手車掌になって遊んでいた。「ピーン……」「ドアがしまります!」「ガターン、ガターン……」「しぶや、しぶやでございませう」など。紙で切符を作ったり、パンチで穴をあけた。駅も作り電車の中では、お客さんがお弁当を食べたりしていた。

あの電車がもしも本当に動いたら、もっと遊びが盛りあがるかもしれないな、もっと楽しいかもしれないな。そう考えてダンボール箱をいくつか用意してみました。大きい箱、子どもの胴まわりくらいの小さな箱。これをつなげたら電車に見えるかしら……。などと、子どもが帰ったあと、私は一人で思いめぐらせてドキドキした気持ちで朝を迎えました。

2 9月25日(土)

大きなダンボール箱を見つけたH男はその中に入
ってみた。そばにいたY男は「よし、絶対に出な
いようにしてやる」と一人ごとを言い、箱のふたを
閉めた。ガムテープで押さえた。……偶然にふたが
あき、今度はY男が入った。——中略——中に入る
ことがおもしろくなったのか、2人でも入る。教師
が「10・9・8・7・6・5・4・3・2・1……
0」と言うと、2人はニコニコして飛び出てきた。
女兒も集まり「おぼけみたい」「キャーッ」と逃げ
る。何度も繰り返した。箱がつぶれてしまうと、今
度はのりまきのようにくるまって、やはり、5・4
……0」と言って飛び出す遊びを笑いながら繰り返
返していた。

子どもたちは、私が予想したものとは、全く違った
遊びを思いつき、ダンボール箱がこわれてもなお、そ
の「お化けびっくくりばごっこ」を楽しんだようでし

た。

私は子どもたちに一本とられちゃったなと思いまし
た。考えてみれば、彼らはまだダンボール箱では遊ん
だことはなく、形も性質も未知の存在だったのです。
すぐに、私が考えたような電車のイメージを思いつく
方がおかしいのかもしれない。「中に入る」「ふた
をする」「とびだす」——こんな遊び方は単純だけれ
ども、ダンボール箱としては、最も basic で、ダンボ
ール箱と仲よくなるには最適だったようです。なにし
る、子どもたちがその遊びを示してくれた途端に、私
の方が笑い出してしまったくらいですから……。

子どもたちと接していると、この時と似たような経
験をたくさんします。ダンボール箱では、私も抵抗な
く、その遊びに入っていたのですが、時には、子ども
たちの思いつきがとても意外だったり、理解できな
かったりして、何ともいえない消化不良のような思い
をすることもあります。そして、こちらのイメージを
押しつけてしまうか、あるいは、逆に、子どもに引き

ずられるだけになってしまいうこともありました。

遊びを、まとめよう、とこちらが構えてはいけな
い。とにかく、子どもたちが楽しいと思うことはどん
なことなのか。一体、何が楽しくて、こんな遊びをし
ているのだろうか……。このことを、子どもたちの遊
びをよく見て、子どもたちと一緒によく遊んで、知ら
なくてはいけない、と思っています。とてもむずか
しいことだけでも……。

子どもの生活を知ること、ちょっとびり

つらい、とこうごと

私の勤めている幼稚園は町の幼稚園です。公立なの
で抽選で、いろいろな家庭のいろいろな子どもが通っ
ています。狭い一部屋のアパートに住む子どもも、大
きな御屋敷のような家に住む子どももいます。

子どもたちと過ごしていて、子どもの生活とい
うか、子どもなりに背中にしてしまっているもの、を垣間見
ることがあります。でも、たとえそれが目に入って

も、私には何もできないのがわかってくると、何とも
言えない気持ちになってしまいます。絵を描くのが大
好きな、でも大嫌いでもあるE子のことを書いてみま
す。

11月。動物園に遠足ででかけたあと、絵の具で動物
の絵を描くことにしました。殆どの子どもは、誘いに
応じて描いたのですが、E子は私に近づきもしませ
ん。声をかけても、「あとで」。「描かなくていい
の」。「という返事ばかりです。でも、E子は普段は絵
が好きで、自由画帳もよく開いているし、その表現力
はむしろすぐれている方です。ある日、一人でポツン
としているE子に話しかけてみました。

「ね、E子ちゃん。どうして絵を描くのいやなの？
E子ちゃんが大好きになった動物のこと、教えてはし
いんだけどな。」

「だって、E子、おなががすくんだもの……。」

おなががすく。絵をかくとおなががすく。この意外
な言葉を聞いて、もしかしたら……と尋ねてみまし

た。

「お母さんが絵を描いていると、E子ちゃんおなががすいちゃうの？」

「うん。だってE子のママ、絵描いていると待っててつて言って、E子のごはん、作ってくれないんだもん……。」

E子の母親は絵画教室を開いている人でした。一人っ子のE子は、いつもそんな想いをしていたらしいのです。E子は負けん気で強い性格の子供でも、強いの強い口調で、泣かされてしまう子供でもいました。ですから「おなががすいちゃう」という感じ方は、普段のE子とはなかなか結びつかない繊細なものに思えました。でも、母親だからこそ、E子は「おなががすいた」とは言えないのかもしれない……。そんなふうにも思えます。E子にとって、絵を描くことは、大好きだけれど大嫌い、そんな相対する感情を抱かせることなのかもしれない……。その後、E子が描いてくれた、大きくていかにも強そうなライオンの絵を見なが

ら、こんなことを思っていました。

おわりに

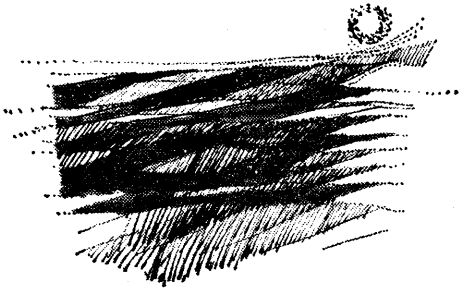
心のままに筆をすすめ、ずいぶんまとまりのない文章になってしまいました。恥ずかしいくらいです。

今日、園庭で子どもたちが氷を見つけてきました。厚さが2〜3センチもある大きな氷です。子どもと一緒にさわってみたり、友だちの顔や足につけあったり、氷を空に向けて太陽をのぞいてみたり……キャアキャア大騒ぎでした。私も子どもに負けなくらい楽しんでしまいました。

——子どもに一杯遊んでもらいなさい——。教育実習を見ていただいた先生のこの言葉だけはどうやら今日も守ることができました。氷が融けると、また、春が一步步近づいてきます。

(世田谷区・多聞幼稚園)

近代短歌に現われた子ども (十一)



大塚 雅彦

(22) 今井邦子

今井邦子は本名くにあ、明治二十三年、父の任地であった徳島で生まれた。父山田邦彦は彼女の出生直前まで、徳島県学務課長兼師範学校々長であった。父の転任等により、父の郷里長野県下諏訪町の祖父母に預けられて育つ。明治四十二年七月(二十才)文学に志して家出上京、詩人河井醉者を頼り、更に詩人の横瀬夜雨を頼って世話になったが、連れ戻される。翌年一月再び家出上京し自活。中央新聞社家庭部の記者となる。ここで同社政治部記者の今井健彦を知り結婚。夫は後に代議士となり参与官、政務次官等を歴任、彼女は政治家の妻として、また歌人としても知られてから、女流名士として社交界に活躍し、文壇や国

文学界にも交遊広く、才色兼備をうたわれてはなやかな時期を持った。若い頃はロマンスめいたこともかなり伝えられ、例えば横瀬夜雨との間に恋愛感情に近いものを持った(『文庫』派詩人の酔茗や夜雨との関係については横瀬隆雄『横瀬夜雨』〈昭41・7〉や、酔茗夫人島本久恵女史の長篇小説『長流』の第5部〈昭36・12〉等に詳しい)り、更には、詩人の三木露風や水野葉舟とかなり親しい交遊を見せたりした。また彼女は気性の烈しい激情的なところがあり、作家水野仙子と共同生活をし、結婚後も夫や子を棄てて家出をし、京都の一燈園で奉仕生活をする等、心の赴くままの自我本位の行動も少なくなかったようである。昭和二十年郷里に疎開、二十三年七月、心臓麻痺で急逝、五十九才であった。彼女と親しく、東京から馳せつけて只一人その通夜をした国文学者の故塩田良平博士は「黒髪は艶々として床の上からこぼれ、五十九才とは思えぬほど一筋の皺もなく若々しい顔だった。大げさに云えば、紫の上の最後もかくやと思われるばかり輝いていた」(東京新聞、昭47・7・15

夕刊)と、その最後のさまを伝えている。

彼女は幼少より文学を愛し、少女時代に河井酔茗主幹の文芸誌「女子文壇」等に詩歌を投稿し、才を認められた。大正五年「アララギ」に入会し、島木赤彦に師事した。昭和十一年、女流のみの短歌雑誌「明日香」を創刊、主宰し師の歌風を継承した(同誌は邦子没後、姪の岩波香代子が主宰、更に現在は川合千鶴子が代表で続刊されている)。歌集は『姿見日記』(散文も収録、大正1)、『片々』(大4)、『光を慕ひつつ』(大5)、『紫草』(昭6)、『明日香路』(昭13)、『こぼれ梅』(昭23)等がある。『今井邦子短歌全集』(昭45・6)も出ている。また、万葉集・源氏物語・枕草子・樋口一葉等についての研究評論や、随筆等の著書も少なくない。その歌風は、初期の頃はかなり情緒の揺れが烈しいが、吉屋信子は、「初期の作品はなにもにも囚われぬ自由奔放な、しかも抒情溢れる新鮮な感覚だった」(吉屋、前掲『ある女人像』)と述べ、むしろ「アララギ」に移ってからの作品をあまり買ってないようである。じじつ、「アララギ」

入会後の作品は写生風で手堅いが、いまひとつ個性に乏しいうらみがあると思われる。

私が興深く思うのは、邦子が娘時代に二度、家庭を持つてからも前述の如く一度、家出というような非常手段をとっていることである。そういえば同じく信州出身の作家平林たい子も、娘時代に家出をして連れ戻されたりしている。この頃、女性で文学で身を立てようなどとすれば、このような反逆的で強烈な方法によるしかなかった。後年、邦子自身が「現在の時代は娘さんが音楽、絵画、文学等で身を立てるにしても、親のよき理解による幸福な援助を受けられるようになられたのも、明治時代の私たちが茨の道を血と涙で開いたからです。そして女が一人で自活するということに対して、世間の男性の無理解さを凌いでここまで来たと思う時、一つの目標を持つ女の強さということを感じるので」と書いていることには実感がこもっており、近代女性史の或る一面を示してくれるのではあるまいか。

①ほろほろと吾子が笛吹く此の母を淋しがらせに笛を

吹きしく

②暗き家淋しき母を持てる児がかぶりし青き夏帽子はも

③故知らずもゆる怒りの怒るままに怒られてある吾子のあはれさ

④病室のこの縁に来て吾子がつく手毬の音に心はなごむ

⑤おほかたの子を持てる人も吾が如く間なく時なくなげきはるか

⑥青年の四肢たくましくふるはせて己れ歎かふ吾が子を見たり

①と②は歌集『片々』所収。邦子は明治四十四年六月に結婚し、翌年四月に長女節子を生んだ。しかし、彼女は妻や母としての自己の生活に満足しきれずに、やはり文学の世界に憧れる気持が強く、しかも、新聞社の政治部長の夫はむしろ世俗的で、そんな妻の心情に必ずしも理解を示さず、夫妻の仲は時に険悪化し、幼い娘もそうした父母の確執を見て育ったようである。①と②の歌に

いずれも「淋し」という語が用いられ、②に「暗き家」などと歎く言葉があるのも、そうした家庭の零屈気を伝えるものである。物言はで十日すぎたる此の男女……という表現で夫との仲を描いた歌がこの頃の作にあり、「児が泣けば母も泣きたき此の家の淋しき軒をめぐれる蚊柱」という作品もある。そうした父母の間において幼い子どもが示す相を、①はその子が笛を吹く動作、②はかぶった夏帽子によって描いている。①は全体が主観の強い表現だが、②の方は下句の客観的表現が印象を鮮明にしている、争う父母の間にある子どもの哀れさが、却ってにじんできくるようである。

③は歌集『光を慕ひつつ』所収。ここにも、はげしい気性の母親に叱られている子どもの姿がうたわれている。むろん「叱られて手をつく吾子が姿よりいとしきものはあらざらなく」という作が此の「悲しき母」という題の一連の中にあるように、叱られる対象の吾が子にすまないという思いは常にあるのに、わけもなく叱ってしまうという反省もあるのだが、それでも吾子をいたわ

れないという自虐の気持であろう。作者の自己像を暗示しているともいえるが、一方、文芸に身を燃やそうという母親を持った子どもの悲哀が描出されているとでもいうべきか……。

④は歌集『紫草』所収。「病苦」という題の一連の中にある。大正七年作。この作品になると、いかにも親和した母子像という風に変っている。邦子は「大正六年に急性リユーマチスを病み、右足不自由となり、「半生の運命をかへた」(『今井邦子短歌全集』年譜)。そういう状態のまま病院に入り、長男幸彦を生んだが、その後も足の療養を続けたようであり、この歌は、七才くらいになっていた長女節子が病床のかたわらの縁で手毬をついてくれたわけで、後年の「宵しぐれしめやかにして物親し凝りたる肩を子に揉ませをり」(大正15年作)などの歌にも通うものがあり、なごやかな内容である。

⑤は歌集『紫草』所収。「我が子」一連の中にある。大正八年作だが、この年は長男が病弱のため海辺の義姉の家に預けたり、長女が疑似ジフテリアとなったり、邦

子も困窮した。そのような背景を知って読むとよくわかる。歌人の故北見志保子は「忙しい日常の生活にあつて、常に小さい時のお子さんが心にかかっている。まことに母親の心というものは、間なく時なくなげいて、子供のことにかまけるものであろう。今井さんは子供にまけて自分の仕事の遅れることと一緒に嘆いたのである。世の母親を代弁している歌である」（『近代短歌講座』第3巻「近代短歌とその鑑賞」昭25・12）と、さすがに同性らしいゆき届いた鑑賞をしている。

⑥は歌集『明日香路』の末尾の方にある「青年期」と題する一連にあり、「男の子^こ汝^なれ青年期来るたくましくなやみを見つつ母はもだしぬ」「この日頃言葉すくなき子にとへば心^{こころ}にふりて物を言わなり」「発育よき四肢ふるはしてみづからを歎き言ふはや母によりつつ」等と共に、よく知られた作品である。これらの歌は昭和十年作であるから長男幸彦は十七才になっているわけで、邦子は長女を嫁がせ、自らは四十代後半期にあった。日毎に身体が遅しくなり青年期に入ってくる長男が、若者らし

い青春の悩みを歎くのを、息つき深く見守る母親の心情がみごとに詠出されていて、私には忘れられない一首である。

(23) 若山喜志子

若山喜志子は本名は喜志、明治二十一年、長野県東筑摩郡広丘村（現塩尻市）の旧家、太田家に生まれた。歌人王国といわれる信州には女流も輩出しているが、そのうち、夫婦で歌人であったいわゆる比翼歌人には、この喜志子や久保田不二子（島木赤彦の妻）や四賀光子（太田水穂の妻）等がある。喜志子は明治四十四年上京して郷土の先輩である太田水穂方に寄寓し、その紹介で若山牧水と識り、翌四十五年同人と結婚し、二男二女を生んだ。文筆一筋の牧水をたすけて貧しさに堪え、内助の功を發揮した。昭和三年、夫と死別、その後しばらく夫に代って歌誌「創作」を主宰した（この雑誌は現在も令息若山旅人氏の主宰で続いている）。戦災で地方に疎開、戦後は東京都立川市に長男旅人氏一家と住み、昭和四十三

年八月没した。享年八十才。なお、彼女の妹桐子（ペンネーム潮みどり）は慧星の如く歌壇に現われ、わずか卅一才で死去したが、一時「創作」を主宰した歌人の故長谷川銀作の妻である。

喜志子は小学校補修科の頃より詩歌を愛好、「女子文壇」に詩を投稿し横瀬夜雨に愛され、投稿仲間の今井邦子や生田花世とも相識した。また、「信濃毎日新聞」の歌壇に歌を投稿し、太田水穂に認められた。牧水と結婚後はその影響のもとに「創作」に作品を発表した。歌集に『無花果』（大正4）、『白梅集』（牧水と合著、大正6）、『筑摩野』（昭5）、『芽ぶき柳』（昭26）、『眺望』（昭36）等がある。『若山喜志子全歌集』（昭56）も出ている。彼女の歌風は「平明な表現のなかに抒情味の強い性格があり、牧水との貧しい生活、死別後の苦しい生活の記録的性格も濃く出ている。また、女性らしいすどい感受性をもって詠まれている」（『和歌文学大辞典』安田章生担当、昭37・11）といわれる通りであろう。

①わが全身の血をさながらに波うたせ浴びる如し子

は乳を吸ふ

②赤い入日赤い入日ときりげなく背の子ゆすぶるかへる草原

③子等の遊ぶを遠くききつつ松原の草に足なげうら安きかな

①は歌集『無花果』所収で、「白き大路に落葉せりき」一連の中にある。母親の全身の血をまるで波うたせて浴びるようだ、と子の乳を吸う動作を描いているのは、まことにユニークで活き活きしている。同じ歌集にある「児に乳をふくます時ふとも来てあとかたもなくきえゆく愁うれひ」が授乳時の感傷の明滅をうたっているのと比較すると、面白い。

②も同書の「郊外の入日」一連所収だが、一、二句が童謡調であり、後の方の「わびしさに」一連の中にある「あそびはぐれ一人し吾子は泣いてくる甘薯畑かんしょばたけの一すぢみちを」がやはり何となくメルヘン調なのと似ている。

③は歌集『筑摩野』所収で、「秋草は言ふ」一連の中にある。楽しそうに遊ぶ子等の声を遠くの方にききつつ

自足している母親の安息が詠まれている。

(24) 久保田不二子

久保田不二子は本名ふじの。明治十九年、長野県下諏訪町に生まれた。島木赤彦（久保田俊彦）の妻であった。姉うたが早く没したので、明治三十五年赤彦と結婚してその後妻となり、三男二女をあげた。彼女もまた赤彦をたすけて内助の功大きく、殊に大正十五年（彼女は四十才）赤彦に死別後は、苦勞して多くの子女を育てた。昭和四十年十二月脳溢血にて逝去、七十九才。夫赤彦の墓の傍らに葬られた。

彼女は明治四十四年「アララギ」に入り、翌年より同誌に作品を発表し続けた。歌風は「一貫して質実且つ素純」（『近代短歌辞典』〈昭62・2〉、鹿児島寿蔵担当）といわれ、平明、地味で手堅い作品を示した。歌集に『苔桃』（昭7）、『庭雀』（昭27）、『手織衣』（昭36）、遺歌集『松の家』（昭41）等がある。なお、岩波文庫版『島木赤彦歌集』（斎藤茂吉と共編、昭11・11）や鎌倉書房版

『島木赤彦歌集』（昭22・9）等の編著もある。

① 三つになる小さき子なれど聞きわけてさむき床べに
一人いねにけり

② これの世にかなしと思ふ児どもらの命護りつつ年を
経にけり

③ 春雨に服を濡らして帰り来し子を伴ひて家のなかに
入る

④ 月よみの光さし射る炉の端のまどは楽し子も帰り
来て

①は「アララギ」明治四十五年一月号所収、「信濃の歌」という欄にある。「三つになる……子」というのは、明治四十二年生まれの三女みをあたりであろうか？ 可憐な子どもの姿態が眼に見えるような歌である。不二子の作品の「アララギ」に始めて出た一連である。土屋文明氏は「久保田不二子夫人の思出」という文章（不二子の歌集『松の家』巻末所収）の中で「アララギに久保田不二子夫人の歌が載った時、左千夫先生が、これは久保田君（大塚註——島木赤彦のこと）よりうまいと言わ

れたのを記憶する。勿論軽い気持ちでの発言であったに違ひないが、夫人の作を高く評価したことは間違ひないと述べている。

②は歌集『苔桃』所収。「病む児」一連中の歌。一連の中に「耳を病む幼な児もりて絵本よみこの日暮れけり外は時雨^{ときぐれ}て」等があり、病む子を看護しつつ、多くの子供たちの命を護りながら経て来た歳月を思いかえした歌だろう。「かなし」は「愛^{かた}し」であろう。

③同じく『苔桃』所収。「子供」という題の中の一首。昭和二年作でこの歌の後に「陸奥^{むつ}の果てより吾子の帰り来て物語る春の夜は更けにけり」という作があるのを見ると、仙台あたりに遊学していた息子（三男周介か？）が春休みにでもなって帰郷した折の作か。久しぶりに帰省した息子を迎えて嬉しい親ごころがうたわれている。結句の字余りが気持のゆとりを象徴するかのようにな、おちついた情調を醸し出していて、気分よい歌である。

この頃の作者は夫に死なれて、子供たちがそれぞれ他郷に勉学に行って居り、一人ぐらしをしていたためか、そ

れらの子供たちが帰ってくるのを唯一の楽しみにしていたらしいことは、やはり昭和二年作の「遠き国に学ぶ吾子らがかへりくる夏の休は近づきにけり」等でもわかる。④は昭和四年作、「眞夏」一連中の作で、まさにその子供が帰省した際の家族団欒の夜の楽しさを詠じたもので、歌は素直すぎるほど単純な内容だが、短歌は何も文学性や芸術性ばかりをねらった作品や、奇を衒った作品ばかりが面白いのではなく、こういう日常的な主婦の感懐を率直に綴ったものにも捨てがたい味わいがあり、むしろそのようなものこそ短歌の王道であることを思うべきであろう。

*

*

*

私のまわりの子どもたち

大塚 房

私の保育園は、母子寮が隣接し、園児の二十五パーセントが単身家庭です。そしてその大半は母子家庭と
いうのが現状です。子ども達はいろいろな問題を背負
わされておりますがここにあげましたのはその一例で
す。

M子の場合

父親が賭け事で借金をつくったため、母親が一方的
に離婚し、母子寮に入居しました。その年にM子は年
少組に入園。母親はいつも気持ちが悪く不安定の上、ヒス
ティックな状態でした。

病院で検査をしても、どこにも病気がない兆候は認

められませんでしたが。しかし、福祉事務所に身体の異
常を訴え、働く事が出来ないなどの理由で生活保護を
受けていました。自分は立場が弱いことから、何でも
やってもらおうのが当り前という気持ちが強くと、福祉事
務所から、再三就労指導があることへの不満を周囲にあ
たり散らしていました。

母親の感情まかせの環境にいるM子はいつもオドオ
ドとしており何事にも自信がなく、身体を小刻みにふ
るわせ、話す時も視線を合わせない有様でした。新ら
しい経験をする事を極度に嫌い、どうしてもしなければ
ならないとなると、全身で抵抗したり、時には恐怖

の表情さえみられました。

このような状態のまま保育園生活も年中組に進級しました。母親は以前と変わらずM子はその反発を登園拒否という形で次第にその傾向を強めました。M子の言動にイライラすると、「お前の悪い所は皆父親と同じだ」と当り散らすかと思うと訳もなく甘やかしてみたりで、子どもの母親への不信任は強まる一方でした。

そのような時期に父親がM子に面会にきました。久しぶりで嬉しかったのでしょう、M子は「お父さんが好き」といった事で、母親は逆上し、M子の目の前で洋服、玩具を全部処分して何一つもたせずY市に住む父親のアパートにM子をおき、母親だけが帰宅しました。

帰宅直後に、母子寮、保育園ともに、退園の届出の手続きで来園しました。母親といろいろ話し合おう中で「貴女も自分のお母さんの暖かい思い出があるでしょう。M子ちゃんにも最後に親としてやってあげる事は

ないかしら……。」というのと、「私は母親はいるけれど

親がいると思った事はない。」とこれが答でした。いろいろな曲折を経て、M子は母親の許に戻りました。その後も暫くは、母と子の冷たいたかひが続きました。M子が年長組に進級してから母親も、少しずつ働くようになりようやく生活に落ち着きが見えている状況です。

保育園は、子どもの保育だけでなく、保護者への対応指導が保育を円滑にするポイントを考え日常の中で常に配慮しております。

先きの例は離婚した母親全部とは云えません。しかし未婚の母親等も含めて、幼い頃の自分の母のあり方、生き方、育て方が将来の人格に影響するという事が云えるのではないのでしょうか。

母親の役割りの重大さを痛感しているこの頃です。

(港区・南青山保育園)

記録映画

『フレীবルの生涯と思想』を製作して

茂木 正年

一九八二年四月二十一日はフレীবルが生まれて二〇〇年にあたる。これを記念して東ドイツ（ドイツ民主主義共和国）では、盛大な記念祭が催された。また、これを機会に東ドイツパノラマ通信社では、フレীবルの生涯と思想を紹介する映画を製作することになり、パノラマのハイエル社長から私に、撮影協力の依頼と招待状が届けられた。数年前から、私が幼児を対象に記録映画の

世界を製作し、その上映運動を続けてきた関係もあったのだが、私が以前に提案した企画に応えてくれたのである。

招待状を手にした私は、たいへんうれしかった。しかし、それと同時に、それではどのような形でこの映画をまとめようか悩んだのである。だが、思案の結果は、迷わず広島大学名誉教授の荘司雅子博士をお訪ねして、先

生のお力に頼るのがいちばんと考えたのである。私は、広島へ飛んだ。一昨年 of 十二月初旬のことである。

事の次第を聞かれた荘司博士は、これはすばらしいクリスマスプレゼントだ、協力しましょう、のお言葉だった。私は、安堵の胸をなでおろした。そして、その旨をすぐさま東ドイツへ電報で伝えた。折返しパノラマからの返信は、荘司博士がご協力くださることはとてもすばらしい条件だ、心から歓迎し、この企画の成功を祈りたいということであった。クリスマスを前に、東ドイツへの取材計画が急展開をしたのである。

*

私たち取材班が、パンナム〇〇一便で東ドイツへ向ったのは、昨年四月十七日の夕方であった。一行は六名で、荘司博士をはじめとして広島大学学校教育学部 of 藤井敏彦教授（藤井先生もパノラマからの招待で）それに我々撮影班の四名であった。私物も含めて約五十個にのぼる膨大な機材を持つての旅である。無事に通関できるかどうか、いつもながら海外取材は、心配の種は尽きない。まして今回は共産圏への旅である。

ジェット機は、ぐんぐん高度を上げていった。

パノラマ通信社が、西ベルリンから入る我々のために指定した出迎えの場所は、チェックポイント・チャーリーであった。しかし、ほつんとそういつてきただけで我々には、そこがどんな場所であるのかさっぱりわからない。ただ大使館で貰った地図に、その場所を印して持っているだけである、心配ではあるが、まことに興味もあった。

しかし、こうして、あれこれ思いをめぐらしていると、我々が乗ったDC9が、右へ大きく旋回した。窓を覗いたら、もうそこはベルリンであった。小さな湖が、無数に点在する美しい水の都である。ジェット機は、機首をどんどん下げて滑るように西ベルリンのティーゲル空港に着陸した。

ドイツの空気は、気持がよかった。爽やかで澄んでいた。樹木は、今、一番に芽ぶいて、やわらかな葉が風にふるえていた。あの有名なドイツの森が、長い冬からめざめて、動きはじめた季節なのである。

空港税関を無事に出ると、あらかじめ機内でチャーターしておいた車が、それも大型のバスが待っていた。量が多いのは人ではなくて、荷物だったのだが、我々を待

つていたのは、八十人乗りのバスだった。しかし約束の時間をとうに過ぎていたので我々は、そのバスの隅の方にちょこんとおさまって国境へ急いだ。

チェックポイント・チャーリーは、あのブランデンブルグ門のそばにあった。案の定ここでは、すべてのものが遮られていた。いわゆる壁である。有刺鉄線は、幾重にもめぐらされて、異様な雰囲気がただよう寒々とした場所であった。見ると、ここを警備する西側三国の兵士は、各々の国の軍服で身をかため、皆銃を構えて警らしている。そして通行路以外のいたるところは、地雷が埋められているのである。また、遙か向こうの東側をみると、向うは向うで、見え隠れする数人の兵士が、やはり銃を片手にこちらを窺うというありさまである。そして、東西の国境守備隊が睨みあう中立地帯は、約三百米ほどの距離であって、そこは荒れ果てて、どちらの国からも力が及ばない。人が住んでいたのに人が入ることができなくなってしまうところが、こんなにみじめで荒廃していくものなのか、恐しいばかりである。赤白に塗られた国境の遮断機だけが、妙に鮮やかで不気味であった。

この国境に、我々の荷物はすでにバスから降ろされて山のように積まれていた。チャーターしたバスは、これ以上は無理ですと、さっさと帰ってしまったからである。さあ、これからどうやってここを通ればよいのだろう。向う側に出迎えている筈の車も、ここからは見えな。深刻である。

いつまでも困った困ったでは埒があかないので、とに角、私は、カメラマンの高岩と、中間地帯を通って東側の検門所へ向った。荘司博士も心配顔である。検門所では、当然のことながら厳しいチェックを受けた。しかし、我々は、パノラマの招待ということもあって、きわめて友好的で、荘司博士をはじめ我々の名前もVIPとしてすでにリストアップされていて歓迎の意を表してくれた。迎える車も三名で、一台は荘司博士の専用車、あと二台は、我々のために用意されていた。五十個もの機材もお構いなしである。しかし、機材の輸送だけは名案がなかった。用意された車も、中間地帯には入れないという。まったく情けないことであった。ふと見上げると、空はどこまでも碧く、白い雲が二つ三つのんびりと浮かんでいた。私は、腹を決めた。時間がかかっても赤

帽の合宿よろしく担いで運ぼうと思った。その時である。どこで見つけてきたのか分らないのだが、高岩が、今にもこわれそうなりヤカーを一台持ってきたのである。まさに渡りに舟とはこのことである。リヤカーは、年代もので空気の半分抜けたあわれなものであったが、贅沢などいっている場合ではない。これでいくことにした。見栄も、外聞も捨てて、東西の警備隊が見守る中を莊司先生以下全員で、リヤカーを押した。珍奇な機材輸送作戦が開始されたのである。みんな必死だった。はじめは、この騒動に乗じて何か起つてはと身構えていた東西の兵士たちも、あまりに風変りな風景に拍子抜けの感じで、一瞬、和やかな笑いがこぼれた。暫し、東西両ドイツの緊張緩和である。しかし、この事件で、日本人は、なんと場当り的なことをやってのけるものだと嘲笑されたのではと冷汗も出たが、この道化が、ひとときでも、ここで睨みあう兵士の心に、何かの橋渡しでもできればとは、それを演じたものの空いばりであるうか。それにしても、この人と人との行き来を、これほどまでに拒絶したこの壁の悲劇は、悲しいものである。

いつの間にか、あの澄んだ青い空が、美しい夕映に染

まっていた。

これが、我々取材班の第一日目であった。

*

四月二十一日は、フレールベルの生まれたオーバーワイスバッハへ記念祭の取材で行った。フレールベルの生家は、すっかり改修されて、二階は博物館になった。又、家の前には、新しくフレールベルのブロンズ像が建てられた。

フレールベル幼稚園も新築されて、可愛い子どもたちが、歓迎してくれた。

フレールベルの生家で、我々が撮影の準備をしていたら、一人の老人が訪ねてきてくれた。シュローテさんである。ここに生まれ、ここに任んでその半生をフレールベル研究に捧げた方である。郷土歴史家とでもいうのだろうか、土地の人たちは、この人のことを「フレールベルおじさん」と呼んで親しんでいたが、道ですれちがう子どもたちは、やあ、フレールベルとそのものズバリと呼んでいた、子どもたちの人気者なのである。莊司博士とも以前に面識があったそうだが、彼は、今回の我々の目的を知るととても喜んでくれた。そして、長い間の研究でわかったことは、なんでも話してくれるというのである。

彼は、地元のフレイベル友の会の会員でもあるのだが、自分の足で訪ね歩いて書いたフレイベルの遺跡についての著述は、権威があり、見事であった。今回の我々の取材が、こんなにまで広範囲にわたり、そして正確にできたのもこの人の指導によるところが多い。彼から授けた貴重な資料の中には、大発見が、数々あった。中でも、フレイベルが、キンダーガルテンの名前を思いついた場所を教えてください、案内して貰えたのはほんとうに幸わせだった。そこは、フレイベルブリックと称して、現在第二恩物を型どった記念碑が建っていた。又、シュタットハイムの町には、フレイベルがその生涯の中で最も幸福で安定した四年間を過ごしたホフマン伯父さんの家が、今も残っていることも教えてもらった。その他フレイベルがバート・ブランケンブルクにウィルヘルミネ夫人と移り住んで、はじめて教育遊具を製作したシュヴァツア川のほとりの水車小屋なども残っていることがわかったのである。日本では分らなかった事実が、次々とでてきた。

ウィルヘルミネといえば、面白い話がシュローテさんの口から飛び出してきた。

それは、この名前は、夫人のほんとうの名前ではなかったというのである。ウィルヘルミネとは、実際はフレイベルの幼な友だちの名前で、フレイベルがとても愛していた初恋の少女の名だったのである。そしてフレイベルは、どうしても彼女と結婚したいと思っていたのだが、彼女は、他の人と結婚してしまった。しかし、フレイベルは、いつまでもその人が忘れられず、夫人と結婚するときに、夫人に請うて夫人の呼名をその名前に変えてもらったそうだ。よほど心に残った女性なのだろう。しかし、それにしてもフレイベルのその願いを聞きとどけてくれたウィルヘルミネが、心にしみる話だった。

シュローテさんは好々爺だった。撮影が終って町へ出たら、あちらからも、こちらからも声がかかった。みんな子どもたちである。彼も、片手をあげてうれしそうに答えた。私は、この七十を越えた老人の柔和なまなざしの中に、ちらりと、ありし日のフレイベルを感じとったのは、私の気のせいであろうか。

生家の裏庭には、早春のやさしい陽ざしがいっぱいである。あたり一面に可憐な草花がうれしそうに咲き乱れていた。ふと気がつくとい匹のリスが垣根ぞいに逃げて

いくのが見えた。

何もかも、昔のままのような気がしてならなかった。

*

四日間に亙った記念祭も終って、いよいよ我々の撮影も本番である。

最初に訪ねたのは、シュワイナにあるフレーベルの墓である。我々は、そこから撮影を始めたのである。そして、その後、イエナ、シュタットイルム、ブランケンブルク、カイルハウなど八ヶ所のフレーベルゆかりの地で、庄司博士の講義をフィルムに収録した。とりわけフレーベルブリックの撮影は、まばゆいばかりの光の中で、たいへん熱がこもった、庄司博士も頬を紅潮させての名講義であった。このスタイゲル山頂からみえるリンラの谷あいの風景は、庄司博士が長い間、それは、どんなところなのだろうかと思いを馳せていたところである。今、先生はその場所に立っておられるのである。五十数年に及ぶフレーベル研究の長い道程を思い返されているのであろうか、萬感、胸に迫るご様子が、よくよく感じとれた。ゴオーという音とともに、下の谷あいから風が吹きあがってくる。博士の山吹色のスカーフが、その風に揺

れる、風はなかなか止まらない、松林を走り抜け、木々の梢をうならせて、ときどき庄司先生のお話をも遮ろうとする。しかし、フレーベルが、何故、幼稚園をはじめたのか、“キンダーガルテンの名には、どんな思想がこめられていたのだろうか”ここでの講義は、この強い風の中でも、ひるむことなく続けられた。この映画の圧巻である。我々が日本にいちばん持ち帰りたい映像なのであった。それにしても、この日の庄司博士はお幸せそうであった。一生をかけて学問をするということはなんとすばらしいことであろう。

常に思うことであるが、映画とは、ほんとうにたくさんの人々の叡知と尽力がなければできないものである。今回の映画も、パノラマ通信社を窓口に、DDRの絶大な支援がなければ、到底不可能であった。スタッフも、大勢動員された。パノラマの副社長をキャップに、本社に二人、現場に通訳を含め四名が、配置されたのである。パノラマが、負担した製作費も巨費であった。パノラマはじまって以来の協力製作費が投じられたのである。撮影現場でも、いつも、その最高責任者が出迎えてくれた。そして、庄司博士と我々の取材のためには、

可能な限り便宜をはらうようにという指令が、いろいろな組織や団体に出されていたのである。

ベルリンの教育科学アカデミーへ行つたときもそうであった。フレールベルの真筆原稿を撮影させてくれるというので訪問したのだが、手厚い出迎えのあと、一冊にフイルされたリストを渡された。そして、ご希望のものは、なんでも御用意致します。すべて撮影許可がおりております。ということだった。私は、びっくりした。せめて『人間教育』の一頁だけでも思っていたからである。莊司博士も、これは異例のことよを連発された。私は、それならばと、「母の歌」も「一八三六年の論文」も「リナ」もと矢つぎばやである。莊司、藤井両先生は、ご研究の資料のためにと、リストの頁をめくった。やがで、次々とフレールベルの真筆原稿が、カメラの前に出された。独特な筆跡で、丹精こめて書かれたものである。感激であった。これが、あの血の出るような苦しみの中で、と思うとそれ持つ私の手は、ふるえた。そして、こんなすばらしい撮影条件をつくってくれた関係者に、私は、感謝し心の中で手を合わせた。

あとで分つたことであるが、われわれの今回の取材に

関しては、はじめから、陰で心くばりをしてくださつた方々がおられたのである。ベルリンのフンボルト大学の学長、クライン博士と、教育科学アカデミーの副総裁ギュンター博士（フレールベル生誕二〇〇年祭委員長）である。お二人とも、現在、東ドイツ教育界の最高の地位で活躍だが、莊司博士とは、十数年来の親しいお友だちだったのである。お二人は、今度の映画が、莊司博士の指導で製作されることを心から喜ばれ、その準備や条件づくりのために精力的に動かれたのである。

今回も、クライン博士は、莊司博士にお会いしたくて、わざわざ研究先のアフリカから日程を早めて帰国されたほどだし、ギュンター博士は、莊司博士が、東ドイツに滞在中、付ききりでお世話をされていた。

今度の映画製作も、こうした方々や関係者の熱い関係が背景にあつたのである。

すべての予定を無事に終えて、莊司・藤井両教授が帰国の途につかれた後、私たちは、ヴァイダにあるフレールベル保母養成所と、ハレ市にあるヘレン・ランゲ保母養成所を相次いで訪問、取材した。フレールベルの伝統を継いだ保母養成所を是非取材したいという私の希望に応じ

てくれたのである。

ランゲ保母養成所は、東ドイツの保母養成所の中心的な役割をしているところで、教師たちの再教育や、通信教育などのステーションにもなっているところである。

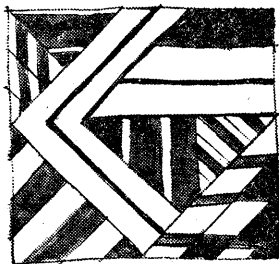
また、フレーベル保母養成所は、特にフレーベルの教育思想や、実践を、カリキュラムに組んで保母を養成しているところで、校長であるクネヒテル博士は、フレーベルの研究者で、かつてフレーベルが、幼児教育の啓蒙のために発行した日曜新聞の研究で博士号をとられた方である。インタビュウの中で女史は、今日、東ドイツが、フレーベル生誕二〇〇年祭を催す意味や、社会主義国家の建国の理想とフレーベルとの関係などを我々に位置づけてくれた。つまり、フレーベルは、二〇〇年前に教育を中心に考えて、世の変革をやるうとした。人間のための幸福な社会をつくる理想のためには、そして、不満に思った社会や、矛盾だらけの社会を変えていくには、教育を中心にして、教育によってよりよい社会をつくる以外にはないと考えた、というのである。また、フレーベルは、教育者は、教える中味と、教育者自身が実際にやっていることとは一致しなければならぬと主張し、教

々の圧力にも屈しないで、その理論と実践を展開した。これはとても大変なことで、特に尊敬すべきことだ、と力説するのである。女史のお話はまだ続いた。フレーベルによれば、教育とは、家族だけの課題ではなく、国民全体の課題でなくてはならない。だから東ドイツは、社会主義の理想を達成するために教育を最も重視して、国民全体で努力している。真の教育によって人間の幸福のために新しい国づくりをしているのだ。フレーベルが考えた理想の社会に於ける人間の役割は、現在でも我が国の人間に対する考え方として位置づけ尊重しているというのであった。クネヒテル校長は、よく通る声で情熱的に演説したのである。

東ドイツは、建国以来三十数年経った。そして今、国民は一丸となって、子どもたちの将来のために生産し、労働している。教育環境も、福祉も着実に前進してきた。働く母親は、手厚く保護され、母親を大切に守るための様々な法律も整備された。それも、そのことが子どもたちの幸福につながると考えるからである。フレーベルが残した遺産は、今、この国で受け継がれているのである。

(日本記録映画研究所)

エリクソンと幼児教育 (18)



仁科 弥生

同一性の形成 アメリカの場合(三)

前回につづいて、同一性拡散状態に陥った青年たちの症例研究において、エリクソンが示した鋭い洞察と卓抜した見解の中に、われわれの今日的課題の解決のための示唆を求めてみたい。

エリクソンはその臨床経験から次のような注目すべき視点を手に入れている。まず彼の言葉を引用しよう。「治療上の問題は、青年がいかなる環境に適応すべきであったのか、そしてそれがなぜできなかったのかという問いを超え、むしろ青年が自分の内面の統一性を失わずに用いる適応のいろいろな方法を設定することに関わっていくこととなる。その治療と自分の目標とを知ったら、青年はその環境を自分に適応させることが十分できるようになるはずである。これこそダーウィンやフロイト的なイメージの通俗的な解釈に欠落していた視点、人間の適応の本来的なものに他ならない」(『青年ルター』前掲書)。このように、エリクソンは人間をただ一方的に社会のシステムによって支配されているものとしてとらえることの危険を指摘し、また人間を主体とする適応のあり

方を強調したのである。それは独自の個としての人間の存在を無視する方向へつきすすむ社会のあり方を問い直すことの必要性を説くものであり、また同時にアメリカだけの特殊現象ではない現代の人間疎外の社会に対する警鐘でもあるといえよう。そして、彼のこの見解は、さ

らに『自我同一性』の中で、精神分析学そのもののあり方を問う重要な視点となって展開されている。たとえば、精神分析理論の中心にある「現実原理」という概念について、それが実際に用いられるときにきわめて曖昧なものになりやすい点を彼は指摘する。すなわち「理論上も治療上も、現実原理とは一定の個人主義的色彩をもっていて、それによれば、よいこととは個人が法（それが強制されるものである限り）と超自我（それが不快をもたらずものである限り）とから身をかわしてうまくやり通すことのできるようなものである。……しかし、西欧の人間は自分の意志に反してまでもより普遍的な集団同一性を発展させようとする。つまり、このような西欧の人間の現実原理は社会原則を含むようになる」（『自我同一性』（前掲書）。その結果、この社会原則によるよいこととは一体、何なのであるか、また、分析家が個人

の適応を問題にするとき、個人がいかにかうまく彼の属する社会の慣習や価値観と折り合っているかということの評価するが、その社会の側に重大な問題がある場合はどういうことになるのであろうかなどの疑問にわれわれは直面することになるというのである。

さらに、自我の概念づけに関して、自我の諸機能を、機械装置のように正確に機能させるために、感情から独立させようとする傾向に対しても、エリクソンは次のように批判的である。「すでに機械化に心を奪われてしまった現代文明の産物である現代精神は、『心的メカニズム』を探求することによって自分自身を理解しようとしていている。もし自我そのものが機械的適応を切望するようになつたら、われわれは自我の本性そのものを扱わないで、その研究に対するわれわれ自身の機械論的アプローチや、その時代に束縛された順応の一つを扱うことになつてしまう恐れがある。……精神分析の貢献の有効性は、限られた条件への単なる適応を超えて、原始的な恐怖でくもらされている可能性を患者たちに自覚させるといふ目的に臨床経験を適用しようとするねばり強いヒューマニスティックな努力によつてのみ、はじめて保証さ

れる」(『自我同一性』)。これはとりもなおさず、精神分析理論や分析家が社会や時の為政者によって利用されてしまうことの危険性を指摘したものである。

そして以上のような観点から、エリクソンはアメリカの社会と青年について次のような分析と提言を行なっている。

アメリカの家庭生活では、外見よりもはるかに色濃いた民主主義がはぐくまれてゐる。たとえば、そこでは家族の一人一人が——両親も含めて——他の誰からも支配されることのないように、各人の権利を守るための訓練がなされている。その場合、各人の利害関係や衝突をこまやかに調停するのは母親である。彼女は、いわば一党にかたよらない、利害関係を超越した存在として、各人の利益ができるだけ強く発展するように面倒をみる。エリクソンは、そのような民主主義の家庭にみられる、家族の行動を説明する一つの原理を指摘する。すなわち、家族で行なう活動はみんながしたいと思つてゐることを表わしてゐるのではなくて、行なうことが可能なことの中で、家族の全員にとって受入れがたい度合いのもつとも小さいものであることを表わしてゐるといふ。勿論、

このようなくみも、もつともらしい既得権や特殊な権利などが少しでも絡んでくると、たちまち混乱する。そして問題の解決にあつて、「多数の意見の一致」をみれば、たとえそれが不承不承に得られたものであつても、家族としては成功である。しかし、一つの利益団体——それが両親であつても赤坊であつても——に有利な決定がしばしば行なわれてゐると、次第に家族としての統合は損われていく。また、家族は一人一人が、年齢の違いや、強さ弱さなどに基づいて種々の特権を要求することのできる同等でない者として細かく分割されてゐる。したがつて、家庭生活は異なる利害関係に寛容になるための訓練の場となる。そして家庭内でのあからさまな憎しみや争いは稀なものとなる。しかし、家族全員にとつて受入れがたくはない利害関係というものは、ともすれば真剣な論争を欠く領域になりやすい。そこで、家庭生活は、一人一人が互いに交わることなく白日夢にふけるための制度となり、家族の間の心理的つながりは一層稀薄なものになつていく。このように、エリクソンはアメリカの民主的な家庭生活にひそむ落とし穴として、情緒的な一体感をもつ人間関係の確立のむつかしさを指摘

している。

さらに、エリクソンは、「摩擦なしに機能を發揮する」という機械の理想が、家庭の外の民主的な環境を毒している事実にも言及している。すなわち、大人は自由な選択ということをするが、現実の世の中は、あからさまな摩擦を避けるために物事を「調整する」ところであると、子どもたちは見るようになる。エリクソンは、ここに若者の政治的無関心が蔓延する土壌があると考えられる。そればかりではない。機械のもつ拘束的な力に対して頑強な抵抗を示したジョン・ヘンリーに象徴されるように、かつてのアメリカ人は、人間が機械によって支配されることを恐れてきた。しかし今日のアメリカには、どんな専門職にも独裁的なボスが存在し、また人々を管理する組織化された強力な機構があるにもかかわらず、人々はそれらに対して鷹揚であるとエリクソンはいふ。とくに、今日の若者たちの多くは、彼らの祖父や父親とは違って、物事を自由に表現する機会は非常に豊富だと感じているので、自由であるということが何らかの自由であるのかわからない。また、独裁者は誰なのかという認識さえもっていない。したがって、彼らは理論的に

は独裁者を憎むが、ボスの支配を構成するボス族に対してはきわめて寛容であるとも指摘する。

エリクソンによれば、ボス族は新しいタイプの独裁者であるという。彼らは自分たちを自力でのし上った成功者であり、民主主義のはなばなしの成果であると考えている。そして「うまくたちまわること」つまり機能することだけを他の何よりも価値あるものとみなし、立法機関や産業、出版界、芸能界などの分野で独裁的な権力を行使できる立場をたくみに利用し、さらに複雑な機構を隠れみのにして、きわめて素朴であり、また他人に対して公平であろうとして自己抑制的になりがちな民主主義の息子たちを籠絡する。

エリクソンは、このような無責任な独裁の有害なモデルを提供するボス族と、情緒的な側面を排除し、機能的な面のみを強調する機械主義とが、アメリカ人の自律性や自発性という同一性にとって危険な存在であり、また青年の同一性拡散の葛藤をより深刻なものにする社会的要因であるとみなしている。そして、民主主義そのものの健全さのためには、自主独立を誇り、自発性に燃える青年たちの知性とエネルギーが必要であり、それには若

者がまず「ボス制度」や「機械や機構」の危険性に気づくことであると主張する。そして彼らが自分の利益のために「機構」に従属しなければならぬという根づよい考え方から解放されることによって、新しい、活力に満ちた同一性を獲得することが可能になるであろうと提言している。同時に、青年の自由な人間としてのゼスチュアが空虚なものに見えてしまう事態や、青年たちの人間に対する信頼が錯覚であり、無駄であると思わせるような事態から彼らを守ることが大人の責任でもあると強調している。（『幼児期と社会』一九五〇年）でなされたこのような指摘は、一九六〇年代のアメリカの大規模な若者の反体制運動を予見するものでもあった。

以上のように、エリクソンは、アメリカの青年の同一性の喪失についての考察の中で、母親の支配的で拒否的な態度という精神医学的「問題」や、父親の側の「障害」が子どもの自我の発達に影響を及ぼす要因であることを明らかにした。しかし同時に、それらが唯一の要因ではないことも指摘したのである。すなわち、精神医学関係者たちが「母親の拒否的態度」を情緒障害の病原とみなして、冷淡で支配的な母親を非難する論調に対し

て、エリクソンは、母親たちにそのような拒否的態度をとらせたものが何であったのかを説き明かし、果たしてどこまで母親たちは責められるべきであろうかと問い、むしろ、彼女たちがそうした形で社会に協力することを強要した産業社会のあり方をこそ問題にすべきであると主張したのであった。これは、個人の心理的葛藤がいかに歴史的、文化的、社会的葛藤と内面的に深く関連しているかという点を追求しつづけてきたエリクソンならではの問題提起であったといえよう。

このことは、とりもなおさず、日本人にはアメリカ人とは異なる日本人特有の同一性の形成の過程があることを意味する。そしてわが国における青年たちにもみられる情緒障害を解明する上で、エリクソン理論はどのように有用であろうかという問題の検討が必要となるであろう。そこで、それに答えるものとして、非行少年の事例研究にエリクソンの人格発達理論を援用した我妻らの研究を紹介することにしよう。

我妻らは、非行少年の人格構造や行動傾向を、両親の人格検査結果や生育史、結婚生活史、少年の生育史などの環境要因との相互関係の中でとらえ、理解しようとし

た。また、適応過程における注目すべき問題として、依存と独立、しつけと自律、性的発達、攻撃と規制、孤立と社会化などを仮定して、考察を試みている。たとえば、連続強姦未遂事件を起こした少年の事例が報告されている。彼は、一見教育熱心で愛情深い父母のもとに、まじめで勤勉な子どもとして育ちながら、満十七歳になって間もなく、突然、行きずりの女の人をおそうという罪を犯した少年である。彼は少年院に送られたが、退院後も、女性に対する盗みやいたずらを繰返した。彼の父親は若い頃、かまぼこ屋の見習職人として働き、後に独立して、自宅で小規模なかまぼこ製造に従事していた。我妻らの分析によると、少年は、乳幼児期に母親が夫婦げんかのたびに彼を残して実家へ帰ったという経験から、母親の愛情の喪失をおそれ、その不安がいつまでも彼を母親に執着させた。また、愛情欲求が満たされないことから、かえって愛されることへのとらわれが大きくそのために外界を客観的にみることができないという弱い自我の持主であった。その上、父親は気まぐれで、苛酷なしつけをしたため、少年は父親を男性的役割模範として取り入れることができなかった。そのような彼が自

己の性的同一性を確立するという青年期の課題に直面したとき、危機が訪れたのである。すなわち、彼は性衝動をコントロールすることができず、また自我の現実吟味の能力が弱いことも重なって、現実的な解決手段を見いだすこともできず、女性に対する攻撃的な性行動という形で補償しようとして、女性に度々いたずらを繰返すことになったと解釈されている。

この他に六人の少年の事例が考察されているが、そこに浮き彫りにされた問題点を要約すると、おおよそ次のようになる。まず第一に、超自我のモデルとして父親が不適切であったことをあげることができる。そもそも超自我は男の子が父親に同一化して、親の道德的側面を内面化することによって形成されると考えられている。ところがこれらの少年の父親は共通して、彼ら自身が精神的未熟で依存的であったり、情緒的に不安定であった。或は少年の幼少時に両親が離婚し、父親が不在のケースもあった。それらが原因で、健全な超自我の発達に阻害されたと考えられる。第二は、母親との愛情体験に問題があったことである。母親自身が未熟であったり、拒否的で、子どもの依存欲求を十分に満たしてやれなかった

場合や、或は経済的に忙しく、やさしく情愛を与える母親としての役割を果たせなかった場合である。このことが子どもにとって愛情喪失の不安となり、母親からの独立を困難にし、弱い自我を形成する一因となったと解されている。第三は、母親との間に初期の強い情緒的結合があって、基本的信頼感は一応獲得されたが、それに引きつづいておこる母子の心理的分離が十分でなかったという場合である。これはアメリカの場合と比較して、非常にきわだった特徴といえるであろう。たとえば、母親が夫との愛の挫折から、それを補償してくれる存在として子どもを溺愛したり、祖父母が「不憫な孫」への同情から保護過剰になりやすい。その結果、子どもに依存の発達段階への固着が生じ、自我の自立性が十分に育たなかった場合や、或は独立への切りかえがうまくいかなかった場合である。その上、養育者が保護過剰の態度をとる場合、子どもは行動を禁止されるという経験が少なく超自我の形成の不全が助長されることも考えられる。

このような少年たちが思春期を迎え、依存欲求や愛情欲求は満たされぬままに、力強く頼りになる男性になる道を模索したのである。彼らの攻撃的行動や非行はその

努力の結果であったと分析されている。このような場合、もし母親の十分な愛情に支えられて少年が母親との分離をなしとげ、外界に立ち向かっていう精神力に満ちた強い自我が育まれていたならば、たとえ父親への同一化に問題があったとしても、大きな障害は生じなかったかもしれないと想定される。或は、母親との愛情体験に欠けたとしても、父親との結びつきが安定していたならば、子どもの愛情体験はそれなりに安定したものになると推測される。さらに、たとえ、母親的養育の欠如を経験しない場合でも、父母の不和、相克が子どもの情緒的安定を損うことや、或は、不仲の父母双方の緩衝地帯として子どもが利用されたりして子どもは強い対人不信に陥り、大きな被害をこうむることも考えられる。このことは、両親が心理的に安定して、子どもに適切な関心をもって接することが、子どもの人格形成にとっていかに大切であるかをわれわれに再認識させ、同時に、そのような健全な夫婦関係の樹立を支援することの必要性をわれわれに痛感させる。

以上の考察は、たまたま男子ばかりの事例についてであったが、私が大学で心理相談にあずかった女子学生の

場合にも、同じように青年期特有の悩みが顕著であった。たとえば、はじめて親許から離れて下宿生活を始めた学生の中には、独立した自律的な大人に移行する過程の試練にすぎず、或は親や家族の価値志向や生活形態を破ることへのとまどいから、うつ状態や心身症をおこして、一時的に現実逃避をはかる者がいる。彼女たちにはこれまでの進学一辺倒の生活や親の過保護からくる社会性の未熟さが目だった。或は、大学生活における個性のぶつかりあいや、はげしい競争の中で、今までずっと優等生できた彼女たちの多くは、自分の能力に疑問をもちはじめ、自己像のとらえ直しにせまられる。その緊張のもとで、エリクソンもアメリカの学生について指摘したように、勤勉感覚が崩壊し、読書や勉学に集中することができなくなつて、無断欠席をつづけ、或は留年するという者もいる。中には、母親との否定的同一化から、女性に対する伝統的な性別や価値観に対して極端に批判的な態度をとる者や、幼少時の女らしさのきびしいしつけに反発して、意図的に服装や身だしなみに関して女らしさを拒否するというような性的同一性の混乱を示す者もいる。それらは、形はそれぞれ異なるけれども、い

ずれの場合も、最終的な自己方向づけを決定するにあたって、より本質的な自己の生き方を模索する彼女たちの真剣な努力のあらわれであり、またエリクソンのいうように一過性の混乱であることが多い。しかしながら、葛藤の真只中にある彼女たちは行きつく先が見えず、その暗さ、苦しさが永遠につづくのではないかと絶望的になる。そのような彼女たちに、そしてその親たちに、私は「明日のあなたは、今日のあなたではない」ということ、苦しむことが無駄ではないこと、そこには成長のあることを、地道に、しかも確信をもって伝える努力をしている。そしてそのよりどころは、この葛藤を青年期特有の発達の課題であり、一過性の現象であるとみるエリクソン理論をおいて他にはないように私には思われるのである。

そしてまた、わが国の精神科医の多くは、若い患者たちと共に共通する特徴としてひ弱さと未熟さを指摘する。彼らは口先では強がりを言うが、実際には何一つ決断を下せぬ子どもたちであり、わずかのストレスや欲求不満にすぐ挫折し、一人で立ち向かえない若者たちであるという。そして、その原因を親の干渉過多とするのが一般的

な見方である。ちなみに、この若者たちにエリクソン理論を適用すると、親が子どもに過度に手をかけ、指図し、或は親の意志や考え方を子どもに押しつけてやらせた結果、子どもの自律性や自発性の発達が阻害され、健全な人格の成熟がさまたげられたということになる。つまり、青年期になり、子どもが自らの将来を選びとろうとするときに、幼児期の自己統制能力や自律性や自発性の訓練が適切でなかったことが障害となつて、青年期的課題の解決に困難をきたしたと考えられるのである。しかしわが国の場合、アメリカや西欧にくらべて、母親と乳児との身体的接触が多く、母親的世話が十分に行なわれているのが文化的特徴であるときえいわれているので、まず初期の安全感や信頼感は形成されやすいとみるべきであろう。したがって問題は、依存欲求が満たされた段階から、幼児の能力の発達に応じて自律性を育てながら徐々に独立へと向かわせるその切りかえの過程にあることになる。つまり、自律の訓練がおそすぎたり、欠けたりすることのないようにもっと細かな配慮をする必要があるということになる。そして、そのような患者たちは、もう一度、親子の間で信頼感を取りもどす努力

をすることによって、まず自己価値感を再確認し、また親や周囲の人々の支援をえて、現実と相互性に向つて学び直すことができるようになる。その修復の努力は自己に内在する力強い回復力によってなされるとエリクソンはいう。

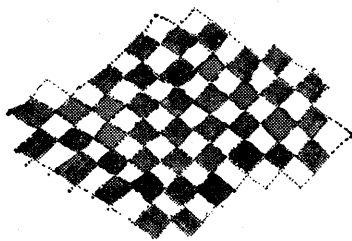
このように考えてくると、『幼児期と社会』の中で示された漸成論的発達分化の理論は、幼児期について、その時期だけを問題にするのではなく、その本當の評価はできないということを強調していることが明らかになる。すなわち、人が各発達段階で危機を解決したとしても、人生のその後の変化がそれらの危機の蘇生を促すこともある。しかしまた、発達が各段階を通じてたとえ順調でなくても、後の段階で補われたり、訂正されたりしようと考へられている。さらに青年期になると、若者は一連の決定を行ないはじめる。ある決定は過去に経験したものの繰返しであるが、新しい可能性にかける決定もあるとする同一性の形成の概念は、青年とは幼児期の心理学的な出来事の単なる不可避的表現ではないというエリクソンの見解を一層明瞭に示している。そして青年が示す情緒的障害の多くは、自己の方向づけを決定するにあた

ってあらわれるまさに正常な発達の危機の様相としてとらえられており、そこには安易な因果説の入りこむ余地はない。先に考察したルター研究も、むしろ万事順調に行かなかった場合の方が、かえて傑出した人物に成長しうることを物語っている。しかしながら、同時にルターは、われわれがかかえる問題や達成しようとする課題にもそれぞれ歴史があるということもわれわれに示された。その歴史は、われわれの幼児期にまでさかのぼるのである。エリクソンにとって、幼児期はまさに人間としての始まりの舞台として位置づけられているのである。

(津田塾大学)

追加参考文献

我妻洋編『非行少年の事例研究』誠信書房一九七三



幼年期の終息を、「決定的な喪失」の訪れとして扱えた詩人があった。一体、何を喪失するのか判然としないままに、子どもは、その喪失を一種の寒さとして実感するという。

とすれば、幼児と呼ばれる幼い人たちを脅かす正体不明のあの不安、例えば、気がついてみたら親しい人々がみんないなくなつて、たった一人、見知らぬ世界に遺棄されているのではないかという、あの捨て子の不安や、いつもと同じ道を歩いているつもりが、いつかとてつもない迷路に迷いこんでしまつて、どこまでいっても家に帰ら着けないのではという、ゆえもない迷い子への恐れなど、この訪れる喪失への予感とその先取りと置えるかも知れない。私どもにとつて、置き去りにされ、見捨てられることへの脅えは、懐しい悪夢とでも言うべき奇妙な想い出の一つであるように見える。

私どもは、誕生という形で始原的な分離を体験している。母胎内の至福の安息、フロイト流に言うならニルヴァナの状態からのこの分離は、私どもに、元型的な捨て子体験として刻印されるのではないか。そのゆえに、数多くの民族が、

その始祖神話を一種の捨て子物語として語り始めるのかも知れない。偉大なる始祖の神は、しばしば、両親に遺棄され、あるいは両親を失なつた孤児として、この世に出現し、そのゆえの迫害の中で様々な奇蹟を発現して神性を顕現するのである。

人々は、みずからの始原的な捨て子体験を、神話という象徴言語で語り継ぎつつ、自身への慰めと励ましとしたのである。私どもは、「常に捨てられつつある」人間の、とりわけ幼い人たちの孤独に対して、鈍くあつてはならないだろう。

(H)

幼児の教育 第八十二巻 第七号

七月号 ㊦

定価三〇〇円

昭和五十八年 六月二十五日 印刷

昭和五十八年 七月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 発行人 本 田 和 子

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一―一九六四〇番

●本紙御購読についての御注文は発売所フレイベル館にお願いいたします

好評発売中

保育の再点検(全5巻)

平井信義・大場牧夫・森上史朗 著

「保育の再点検」の大きなねらいは、社会性の育成にあります。子どもの社会性を育てるにはどのような保育をしたらよいかとお考えの先生方に、きつと役立つ〈全5巻〉です。

本シリーズの特色は、

- 日常的で身近なテーマをとりあげています。
- 保育事例を分析し納得いくまで話し合われています。
- 現場からの声として、よその園の保育が紹介されています。

- ①望ましい生活習慣
- ②望ましい集団づくり
- ③望ましい当番活動
- ④望ましい行事と生活
- ⑤望ましい言葉の指導

A5判・セットケース入り各208頁・セット定価6,750円

子どもの遊び(全6巻)

●全国学校図書館協議会選定図書

0歳から三歳(3巻セット)

土屋多喜栄 丸尾ひさ
本吉圓子 田中文字子 著

三歳から六歳(3巻セット)

本吉圓子 前 典子 笠間典美
田中文字子 矢作邦子 著

この本に収録した遊びは、0歳から6歳までの子どもの成長過程において、だれでもが大好きで、必ずといってよいほど通過する遊びです。また、これだけはぜひ経験させたい遊びを現場の体験を生かした保育者の目でまとめたものです。遊びの中で何が育っているか、保育者はどんなかわり方をすればよいか、どうしたらその遊びがさらに楽しくなるかなどについて考え直すヒントがたくさんもり込まれています。

B5判各巻ケース入り各112頁・セット定価各3,300円

好評発売中

文部省・著

幼稚園における 心身に障害をもつ幼児の 指導事例集

障害をもつ幼児を受け入れる心構えと、指導の事例を豊富に提供!!

本書は、障害をもつ幼児に対する指導のあり方や、受け入れに当たっての考え方など、基本的なポイントを示したものです。各地の幼稚園の指導事例が豊富に紹介されていますので、実際の保育指導に大へん役立ちます。

A5判・184頁・定価90円
